
白いセントレア

HIDEAWAY 'S Bar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白いセントレア

【Nコード】

N8991I

【作者名】

HIDEAWAY'S Bar

【あらすじ】

倉田愛莉が援助交際を始めたのは高校2年生の夏休みからである。その日暮らしのホームレス少女の選んだ道を記す長編。

去年のクリスマスの頃に書いた小説です。
早いですねー、1年って・・・

第1話 追想の宴

> i 3 2 6 1 — 5 3 3 <

:

- - - - - メッセージはありません - - - - -
- - - - -

10分ごとのメールの確認は虚しく同じ内容を表示していた。
待ち合わせの時間は6時半である。

もう2時間近く待っており、そろそろ別のアポを取ろうと考えていた。

最近是不景気のせいかこういったことが少くない。

早めに泊まる相手がネットカフェに行くお金を手に入れなければ、
またマックで

オールするはめになる………

倉田愛莉が援助交際を始めたのは高校2年生の夏休みからだった。
きっかけは高校に入学して直ぐ両親が離婚し、生活が不安定になっ
たこと。

そのせいで携帯電話代が払えず、たまたまその時参加していた携帯
ゲームの

コミュニティにアクセス出来なくなった……というのが一番の
原因かもしれない。

今になって思えば7200円の請求が愛莉の人生を変えたのかもしれない。

今度のメールの相手は、以前SMの出会い系サイトで知り合った慎
二である。

なかなかのイケメンで、35歳だと言っていた。

その時はまだ高校生だったので、SMがいったいどんな事をするのかも

よく分からないまま会った約束をし、ホテルに着いて行った。

慎二はそれほど不安になるようなプレイはせず、普通に会話をして優しく抱くだけだった。

その後も別の男達とこのサイトで出会ったことが何度もあるが、その中には

思い出たく無いような事をされたこともあった。

ただ、このサイトでの出会いの相場は普通より少し高かったのと、泊まりが

無かったからその時付き合っていた彼氏の家に帰ることが出来た。

30分後、新着メッセージを受信した。

9時半に栄の三越の前で会おう、と書いてある。

「これで今夜はネットカフェで泊まれる・・・」

愛莉は待ち合わせ場所に向かって歩き出した。

ひびく

広小路通りはクリスマススのイルミネーションが眩いほど美しい。

ダウンジャケットを着ていても今夜の風は少し冷たかった。

幸せそうなカップル達が愛莉を邪魔者ように追い越していく。

慎二は時間ぴったりに現れた。仕事は何をやっているのかなど何も知らないのだが

多分営業か何かだろう。スーツ姿が似合っている。

「愛莉ちゃん久しぶり！まさか君からメールが来るなんて思ってもいなかったよ。」

元気だった？もう2年位経つんじゃない？「優しい言葉を掛けて

くれた。

愛莉は内心ホッとしていた。高校生というブランドが無くなった今、制服を着ていない

自分は、そこらの何処にでも居る20歳だ。顔だって美人なんかでは無い。

勿論、お金をかけてヘアースタイルやファッションをキメれば、それなりに見えるとは思うのだが・・・

「愛莉ちゃん、何時まで遊べるの？ いや・・・今夜は泊まれなかなーと思って」

「別に・・・時間は気にしないよ」

これでシャワーしてベッドでゆっくり眠れる。

内心ではそう思っていたが、極力態度には出さないようにした。

これも自分を高く買ってもらったため最近身につけたテクニックだ。

それにしても空腹である。朝ネットカフェでモーニングセットを食べたきりだった。

財布の全財産は1129円だから食べれない事は無いのだが、なんとなくそのお金は

使わないようにしていた。

「愛莉ちゃん、晩御飯食べちゃったかな？ 良かったら付き合っ
て欲しいんだけど・・・」

独りで食べるのって寂しいんだよねー」

愛莉は小躍りしそうになるのを必死で我慢した。

慎二が連れて行ってくれたのは、それこそ高級と言う言葉が似合い

そんな焼肉料理店で

22階に在った。エレベーターを降りると、直ぐにタキシード姿のウェ이터が席に

案内してくれる。店内は少し暗めの照明で、どの席からも名古屋の夜景を満喫出来る設計になっていた。

「すごい・・・こんなお店初めて入った」とうとう本音が出てしまった。

自分を高く売るためには喜んででは負けだと思っていたが、この雰囲気完全に吞まれてしまっていた。

「何でも好きなもの頼んでよ・・・そうだ、ビール飲めるんだっけ？」

そう言いながら高そうな肉をどんどん注文している。

メニューを見ていると既に20000円近くなっているのではないか？

中ジョッキで乾杯した後、あれから2年の事を色々話していた。

勿論、愛莉の話は全部嘘である。

慎二は暫らくニューヨークの支店に行っていたらしかった。はつきりとは言わないが証券会社か何かのようで、ダウがどうの、ナスダックがあれだのと愛莉にはまったく

分からない言葉を使った。その頃に離婚したようである。

「先月日本に戻ってきてから毎日独りで外食なんだ。寂しくてさあ」

慎二は笑いながら言った。
もしも自分が普通のOLなら、こんな彼氏が欲しいと思うほど慎二は優しく

スマートだ。

話が楽しかったせいもありあつという間に時間が過ぎ、店を出たのは0時を

廻っていただろうか。

二人はタクシーに乗り、近くのラブホテルに入った。

ここはたまに使うことがある。受付のオバちゃんとは顔見知りだが今夜は無視していた。

相手もその辺りは気を利かせてくれている。愛莉を一端の^{いっしょ}プロと認めて

いるのだろう。

部屋は5階の露天風呂付きの部屋だった。

以前来た時は休憩だったから露天風呂に入ることは無かったが、このホテルの

売りの一つである。

先にシャワーを使わせてもらった。

昨日はネットカフェに泊まったがシャワーをしていない。

どうせ援交しなければいけないんだから、その時に風呂に入れば良いと

思っていたからだ。

たまには湯船に浸かってゆっくりしたかった。

風呂から上がってベッドでテレビをつけていると、以前よく母と観ていたドラマの

再放送がやっていた。

愛莉がまだ小学校4年生頃の話だ。両親の喧嘩も無く幸せな日々だった。

愛莉の家庭がおかしくなり出したのは6年の時、父親が性的な虐待を始めた頃からだった。

その頃はただ身体を触られる程度であつたが、中学に入って間もなく母が浮気相手と外泊

した日に愛莉は父親に犯された。その日以来両親が離婚するまでの3年間、何度となく

父の性的虐待を受けたが、とうとう一度も母親には話さなかった。

最低の父親だつたが自分が話した結果家庭が崩壊し、生活が不安定になる事の方が

嫌だつたのである。

しかし結局は母が浮気相手の家に行ったきりになり、父が離婚届を提出した

のだが……

離婚後は母と2DKのアパートで暮らしていた。が、時々現れる母の彼氏が嫌で

家出をした。それからずっとこんな生活をしている。

「もう4年か……」愛理は小さくため息をついた。

第2話 序章の宴

> i 3 2 6 2 — 5 3 3 <

:

慎二がバスローブを着てベッドへ入って来た時、愛莉は少し眠っていた。

ここ最近ネットカフェの椅子で毎晩眠っているせいか、睡眠不足ぎみである。

服を着たままという事もあるが、パネル一枚隔てた隣が見知らぬ男で安心できないし

それ以外にも時々こひがうるさかったり、変な臭いがすることもあるのだ。

「愛莉ちゃん、寝ちゃった？」慎二の声で目が覚めた。

「あつ、ごめんなさい・・・すっかり眠っちゃって」

「いいよ。眠ってても。僕も少し眠たいんだ・・・」そう言って慎二は大あくびをした。

このまま眠ってしまいたかったが、ヤル事をやってお金を貰わなければ明日はどんな

ハゲおやじとセックスをしなければいけないかわからない。それならこの恋人にしてもいいと思える慎二とするほうがずっとマシである。

「だって・・・お金の事もあるし・・・」凄く恥ずかしかったがコレだけは言わな

ければ・・・

そう思いながら、さっきまでの恋人気分のような自分から売春婦へ真っ逆さまに

落ちていくような感覚で、軽い眩暈めまいがした。

「じゃあ、お金は先に渡しておくよ。ちよっと待って・・・はい、

3万で良かったよね？」

そう言うのと分厚い財布からきれいなお札を3枚渡してくれた。

「ありがとう・・・」そう言って自分のバッグにお札を突っ込んだ。悲しかった。

これまで何度も、援交相手と気まずい雰囲気になったことはあったが、今日は特に嫌だった。

こんな事なら少しくらい乱暴に扱ってもらったほうがまだ救われる・・・

愛莉はそんな風に思っていた。

「腕枕したいんだ・・・ずっとやってなかったから久しぶりに。いいかな？」

「・・・いいよ。そんなんで良ければ、いくらでも」不思議な感覚だった。別に恋人でも無いし「好き」というわけでもない。

勿論、嫌いではないがまったく別世界の人である。それなのにこうして腕枕をされているととても安心できるのだ。

「恋人が欲しいな・・・」心の中で呟いてみた。

朝、目が覚めると慎二はまだ眠っている。いつの間にか絡ませていた太ももが

彼の変化を感じ取っていた。このまま何もせずにお金を貰うのは何故か気が引けるし

出来ればこの次も会ってもらいたかった。

愛莉は布団の中に潜り込み口を使った。

「うん・・・愛莉ちゃん？」彼が益々力強く漲みなぎってくるのがわかった。

自分でも少し興奮しているのがわかる。触ってみた。やはり何時もより濡れている。

愛莉は掛け布団から少し顔を出すと慎二にキスをした。そっししながら自らの手で彼を導いた。

「愛莉ちゃん、コンドームは？」

「だいじょうぶ・・・今日は着けなくても・・・」

二人はそのまま8時過ぎまで3度も交わった。

チエックアウトは10時だから、そろそろ起きて用意をしなければならなかったが

身体が心地よくダルイ感じがする。

「今日一日、一緒に居ない？ちゃんとお金払うから」慎二がキスしながら聞いてきた。

「いいよ・・・お金は要らない」そう答えた。これで少しは対等で居られそうな気がした。

今日一日だけ恋人気分でいたってきつとバチはあたらなと思う・・・

・
愛莉はそう感じながら慎二の胸に顔を埋めた。

第3話 謝肉祭

> i 3 2 6 3 — 5 3 3 <

:

二人がホテルを出たのは12時を少し過ぎていた。愛莉が露天風呂に入ってみたいと

言ったので二人で一緒に入り、その横のテラスにあるガーデンテーブルで、少し優雅な気分でもーニングセットを食べた。

「愛莉ちゃん、仕事とかして無いの？」慎二が何気なく聞いてきた。嘘を言ってもいいのだが、なんとなく本当の事を言ってしまうようになった。

「実は私、プーなんだ……」

「えっ？……そうなんだ。じゃあ流行のニートなんだ。いいじゃない、親に余裕があるんなら別にアクセク働らなくなたって」さすがにネットカフェと援交で生活してるとは

言えなかったので軽く「そうだね」と頷いておいた。

「お昼からどうしよう？愛莉ちゃん何かしたい事ある？」慎二が眩しそうに手で日差しを遮りながら言った。

「別に行きたいところなんか無いけど……」

「じゃあさ、今晚ライブ観にいこうよ。今さ、いいのが来てるんだよね・・ブルノート

行った事ある？」慎二の話によると、学生時代からバンドでコピー

していたギタリストで
ラリー・カールトンというジャズミュージシャンが来日しているらし
かった。

ニューヨークでは何度か行ったそうだが、日本で観るのは初めてだ
という。

夜といたって何もすることは無いし、昨日お金を貰っているから
暫らくは

ネットカフェで寝泊りできる。あまり乗り気ではなかったが一緒に
ついていく事にした。

「だったら、ちよつとお洒落したほうがいいな・・・よし、服買
いに行こう！

お昼やる事ができたね？」そう言っただけに笑う慎二を、愛莉
はポカンと見ていた。

服買ってくれるのかな？そんなうまい話って信じていいのかな？そ
う心の中で

呟きながらセントラルパークを横断していた。

「愛莉ちゃんどんな服がすきな？」そう聞かれたが、普段はスー
パーかシママムラで

2000円までの買い物しかしないので、自分が何が似合うかなん
て分からない。

そもそも、服と言っても援交するときの服・・・つまり今着ている
コレが唯一の

オシャレな服であった。他は栄のコインロッカーのバッグにトレー
ナーやセーター

があるくらいだ。

「こんな感じはどうか？」慎二がショーウィンドの中のキレイな
ドレスを指差した。

カラフルなオレンジのワンピースだった。

あんな物マネキンしか着れないだろう・・・

愛莉は他人事のような目で見つめていた。

「この店良いんじゃない？」慎二が入ったのはテレビに良く出てるタレントが着て

いそうな服がたくさん展示してあり、チラッと値札を見ると安いものでも2万位

高い物は5万近くしている。

「僕が適当に選ぶから着てみってくれる？」そう言うとワンピースを何着か選びはじめた。

試着室に入り慎二が持ってきた服を順番に着て見せた。

いつも援交する時、下着は出来るだけ綺麗で新しいのを着けるようにしていたが、本当に

良かったと思う。

「それ、かわいい！決まりだね。それと……」慎二が選んだのは少しボリウムの

あるスカートにベロアのトップスを合わせたワンピースで、かなり大人っぽい雰囲気

だった。

それに合わせたヒールやコート、バッグまで含めて8万円近く支払っていた。

「全部着て行きますから……」そう慎二が言うと、私の着ていたものを店員が持って

行った。恥ずかしかった。安物ばかりだ。それにしてもこんなに買ってくれるなんて

どういうつもりなんだろう？凄くお金持ちなのか？

でも、こんな服買っても多分もう着る事は無いだろう……待ち合わせには不向きだし

ネットカフェじゃ襲われそうだ。

実際夏にミニスカートで寝てい

たら、知らない男が

脚を触っていた事があった。愛莉が気づくとすぐ出て行ったから良かったが、その時は

声をあげることも出来なかった。

「愛莉ちゃんバツチリじゃん！　かわいい。　普段もそんな格好すればいいのに」
何も知らない慎二が褒めてくれた。悪い気はしなかった。今日一日を楽しめれば
それでいいと思った・・・

第4話 仮面舞踏会

> i 3 2 6 4 — 5 3 3 <

:

夜のライブまで束の間の恋人気分を味わった。ハイヒールを履くのも初めてだったし

お洒落なパスタのお店でランチをしたのも、一杯700円もするコーヒーを飲んだのも初めてだった。

「愛莉ちゃん、ほら、君のこと見てる男の子が居るよ。よくナンパとかされるんじゃない？」

慎二がひやかすように言ったが、街を歩いていて声をかけられたことなど無かったし

そんな場所自体を避けていた。人の多いところが苦手だった。

「わたし、あんまり人混みとか好きじゃないから……」

「そうなんだ。愛莉ちゃん可愛いからきつとモテるんだろうなって思ってた」

「可愛いなんて言われた事無いし……」実際には援交する相手に可愛いとか

肌がキレイだとか言われる事はあった。でもそんな台詞は嬉しくも何ともなかった。

「ここだよブルーノート。もう入れるみたいだね」慎二がビルの1階を示した。

ホールはそこから地下に降りたところにあつた。テーブル席とスタジアムのような席の

2通りあり、テーブル席へ案内された。自由席は僅かしか残っていなかった。

「まだ時間があるから食事を頼もう。美味しそうだねー、ビール飲むでしょ？」

仔鴨のローストやエスカルゴなど、どれも食べた事の無い料理ばかりだ。

演奏はビールを2杯飲み、シャーリーテンプルというカクテルを飲みだした頃始まった。

素敵な演奏だった。ギターは涙が出るくらいやさしい音がしていた。こんな世界があるんだ……生まれてはじめての夢のような空間に酔いしれていた。

ファーストステージが終わって慎二が話しかけてきた。

「驚いたな。愛莉ちゃん、泣いてたんだね？どうしたの、何かあった？」

「だいじょうぶ……ギターの音が優しいから……涙出ちゃった」「凄いな……音楽やってるの？バンドとか？」

慎二がえらく褒めてくれた。昔から歌う事は好きだった。中学の頃、学校の文化祭で

バンドのボーカルとして参加したことがあった。父に犯された影響で少しグレてた為

髪を染めたり眉毛を剃ってたのが、ロック系のバンドのメンバーに気に入られ

2ヶ月だけメンバーになってステージに出たのである。

「昔ね……」ちょっと笑いながら言う。

「へー、そうなんだ。じゃあさ、後からカラオケ行かない？」慎二はそう言って

ロックグラスを空けた。

ライブは10時半過ぎに終わり、帰りがけに演奏者のCDを買ってくれた。

ギタリストにサインと握手をもらい、少し舞い上がるような気持ちになっていた。

後からネットカフェでもう一度聴いてみよう。興奮して眠れないか

もしれない・・・

そう思った。

それから二人はカラオケボックスに行き何曲か歌った。

「愛莉ちゃん、メツチャ上手いわ。今度、一緒にライブ出演しない？素人のコンテスト

みたいなものなんだけど・・・絶対ウケルと思うなあ」

少し嬉しかった・・・本当にまた会ってくれるんだろうか？自分でも変だが慎二に

少し恋してるのを感じていた。これだけの事を一度に体験させてくれたのがその原因

だったかもしれないが、その会話の内容や物腰も今までに出会った事が無いタイプだった。

カラオケボックスを出たのは1時を廻っていた。

「帰りの電車、もう無いでしょ？家は近いの？」慎二は何も知らずにそう聞いてきた。

「まあ、近いといえば近いけど・・・いいよここで、明日早いんでしょ？」

「明後日まで休暇をとってあるから僕は大丈夫だけど・・・あの・・・ウチこない？」

「えっ？・・・」援交で会った何処の誰ともわからない私を家に連れて行くって

事なの？自分の本名とかばれちゃうじゃない・・・そう心の中で思っていた。

「あつ・・・ゴメンね。変なこと言っちゃったかな？ そんなの嫌だよな？」

「別に・・・嫌じゃないけど・・・」

「ホント？！やった！！じゃあタクシーつかまえるよ」

慎二は凄く嬉しそうにタクシーに手を上げた。

慎二のマンションは20分ほど走った所に在った。12階建ての高級そうな建物だった。

部屋はとても大きく、テレビドラマに出てくるような感じた。

「ここで奥さんと住んでたの？」別に深い意味は無いが気になったので聞いてみた。

「違うよ。ニューヨークに行く前に買ったんだけど・・・アイツとは一度も住まなかった」

「そうなんだ・・・」

「女子を入れるのは初めてなんだ・・・ドキドキしちゃうな」そう照れながら言った。

慎二はお湯を溜めながらバスルームから何か言っている。

「何？　どうかしたの？」

「いや・・・下着とか欲しかったよね？　3軒隣がコンビニなんだ買いに行こう」

私の手を引つ張りながらそう言った。　少しドキドキした。

昨日から裸も見てるしキスだってしてるのに、こうやって手を握られると胸が苦しく

なるような感覚がするのは何故だろう？　　慎二に恋をしているからなのだろうか？

慎二はコンビニでビールやワイン、それにツマミを少しと私の下着を買ってくれた。

帰りのエレベーターで自分が濡れてくるのが分かった。

我慢できずに慎二の胸に顔を埋めた。

第5話 運命

> i 3 2 7 4 — 5 3 3 <

:

エレベータの扉が12階で開くまでの少しの時間が待てない気分だった。

「愛莉ちゃん・・・どうしちゃったの？」慎二が焦らすように話しかけてくる。

自分でも何故かは分からない。援助交際で嫌いなタイプのオヤジとしていても時々

こんなふうになる事があった。Mっ気なんだろうか？

「だめだよ・・・愛莉ちゃん、そんなとこ触っちゃ・・・カメラ付いてるからさあ」

やっと扉が開き1205号室に入った。

「して・・・」愛莉がそう言うのと、今日買ってもらったばかりのワンピースの裾を

捲くりあげ、慎二が荒々しく入ってきた。シューズボックスの鏡が自分の姿を映していた。

いい表情だと思った。ラブホテルの大きな鏡に時々自分の姿が映ることがある。その時

自分が綺麗だと思う。スタイルだけではなく顔やその表情も全部好きだった。

普段着ている物が安っぽいせいで、同世代の女の子と比べられるのは嫌だけど裸や

喘いでる顔なら同じだと思った。

愛莉は行為の最中、結構声を出すほうである。勿論演技の時の大半であるが、今夜の

ような気分の時は声が大きくなる。

慎二のマンションの廊下も、多分今、愛莉の喘ぎ声が響いてるはず

である。

しかし慎二は、そんな事お構い無しのように愛莉に歌を歌わせていた。

その後2人は一緒に風呂に入った。

「愛莉ちゃんエッチだね。いつもそうなの？」

「そんな事無い・・・するのホントはあんまり好きじゃないから・・・」

「彼氏とはしないの？」 慎二は彼氏が居ると思ってるようである。

そういえば初めて慎二と出会った頃は彼氏が居た。4歳年上でバーテンダーの直人である。

本人はそう言ってたが多分ホストのようなものだろう。

駅前で待ち合わせをしている愛莉に声をかけてきたのだが、そのままずるずると

1年間付き合っていた。直人は愛莉が援交しているのを知っていた。金がなくなると愛莉に援交するよう要求した。多い日は日に3度もホテルに

行った事がある。SMの出会い系サイトも直人に教えてもらったのだ。

愛莉も住むところがあるなら、それでも良いと思っていた。それに直人は優しくった。

風邪をひいた時などは1日中看病してくれたし、食事もよく作ってくれた。

ただ直人から逃げ出したのは、ある日、家に帰ると暴力団組員風の男達が5人来ており

腫れ上がった顔の直人が、私と引き換えに借金をチャラして欲しいと言ったのを聞いたから

である。その日はその男達にまわされたが、翌日の朝早く、皆が寝ている間に逃げ出した

のであった。死ぬ気で走った。裸足だったが、子供の頃よく遊んだ中村区の公園の遊具の

中で隠れていた。着ているものは暴力団員が着ていたワイシャツだけだった。

近くのアパートから着れそうな服と、ベランダに置いてあるスリッパを盗んだ。

だぶだぶのジーパンとトレーナだったが、12月の早朝、無いよりはマシだ。

携帯電話は持っていなかった。とりあえず援交してお金を稼がなければと思った。

その時思いついたのはコンビニの雑誌だった。後ろのほうにテレクラの番号が

掲載されているのを憶えていたからだ。それから自動販売機の下を小銭を探して

廻った。2時間間で2百円近く集まった。急いでコンビニに行き必死で番号を暗記した。

お昼に待ち合わせが決まった時、残金が20円になっていた。

震えながら電話ボックスの中で相手を待っていた。

約束時間に20分遅れて白い乗用車が前に停まった。50代のサラリーマンだ。

ホテルに入ると愛莉の身体の痣や足の裏の傷を見て少し怖がっていた。

この時は中に出してもいい事を条件に2万円貰った。嬉しかった。

昨夜から何十回も男の液体を受け入れた膣内は、爛れて痛かったが我慢できた。

そのお金で吉野家に行き空腹を満たした。美味しかった。

温かい味噌汁を飲んだら涙が出てきた。その後シママムラでちゃんとした服を買った。

全部で4000円だった。暖かった……

そんな事を思い出していたら涙が出てきた。

「愛莉ちゃん……大丈夫？ 変な事聞いちゃったかな？ ゴメンね」

「うっん．．．彼氏なんか居ないし．．．」そう言つと頭まで湯船に浸かった。

第6話 幻想即興曲

> i 3 2 7 9 — 5 3 3 <

：

それから明け方近くまで2人でワインを飲みながら話をした。勿論、自分の過去の事などは話さなかったが慎二の話は面白かった。吉川慎二は名古屋の国立大学を卒業してから2年間、海外をバックパッカーのように旅して

廻っていた。そのときの話や、仕事で行ったいろんな国の話をしてくれた。

ずっと聞いていたかった。特にアメリカのモニュメントバレーの話は感動的だった。

「今度一緒に行かない？絶対に感動すると思うなあ、あの太陽を見たら・・・」

「・・・行ってみたい」そんな事一生無理だと思った。自分は夢なんて無いし毎日が

暮らしていけるだけでよかった。病氣にかかって死ぬのならそれもアリだと思っていた。

だからコンドームは使った事がなかった。エイズの事はもちろん知っているし、その他の

性病もこのままでは必ず罹るのは分かっていた。幸いにもこの4年間で一度もそれらを

患った事は無かったが・・・

愛莉は時々、相手を中で果てさせていた。それは自分が妊娠できない身体だからである。

そのことを知ったのは、産婦人科で父親の子供をおろした時に医者

に聞かされた。

元々子宮自体に問題があり、その時の中絶により決定的なものになってしまった。
らしかった。

別に子供が欲しかったわけでは無かったが、その時は酷く落ち込んだ。

父親も暫らくは優しくかったが、2ヶ月もすればまた身体を求めてきた。

愛莉が父を拒まなかったのは時々お小遣いをくれたのと、家庭にお金を入れていたから

だった。勉強は嫌いだったが高校には行きたかった。学園祭に一緒に出たバンドメンバーに

片思いをしていたからだ。彼の受験する高校に行きたかったのだ。

しかし結果は愛莉が合格しただけだった。運が良かっただけなのか
もしれないが悲し

かった。それからの高校生活は何もやる気がしなかった。そこに両親の離婚である。

生活費もままならなかった。

「愛莉ちゃん、今度旅行しようか？」慎二がそんな事を言い出した。
「無理だよ多分・・・お金ないし」

「そんなの気にしなくていいよ。全部用意してあげるから。どこがいい？海外？」

「行ってみたいのは・・・さっき話してくれたモニUMENTバレー
ーだけど、国内でも

いいな・・・連れてってくれるの？」あまり期待はしていないがそう
答えておいた。

愛莉はあまり人を信用しない。彼女の人生がそうさせていたのは言
うまでも無いが

心のそこから何かを欲しがったりする事もなかった。それは子供の
頃からそうだった。

でも、今度の話は少しでも良さそうな気がしていた。
その日愛莉は慎二の腕枕でぐっすりと眠る事ができた。

第7話 ポロネーズ

> i 7 7 8 0 — 5 3 3 <

二人は2時過ぎまでまどろんでいた。慎二の方が少し早く起きシャワーを

浴びている。慎二のベッドはすごく寝心地がよかった。

「愛莉ちゃんもシャワーしない？」バスローブ姿で手にはフライパンを持った慎二が

ベッドルームに入ってきた。

「・・・何やってるの？」

「いや、朝ごはん？作ろうかと思って・・・」愛莉は珍しくクスツと笑った。

その滑稽ないでたちもだが、慎二の元来の優しさがそうさせたのだろう。

昨夜借りた慎二のトレーナーを着た愛莉がバスルームから出ると、部屋中に煙が充満し

慎二が慌てふためいていた。

「なにやってんの?!」愛莉が言うと、キッチンから申し訳なさそうに慎二が顔を出した。

「パン焼いてるの忘れてた・・・」愛莉がキッチンに入ると泥棒でも入ったのか?と思う

ほど、くちやくちやになっている。

「で、何作ったの？」

「いや、・・・まだ、何も・・・」また笑いが込み上げてきた。

「いいよ、私が作るから・・・って、まず片付けからかな？」

「愛莉ちゃん、料理できるの？」驚いたような顔をして慎二が言った。

中学の頃から母が外泊をしていたため、料理はよく作っていた。

一緒には食べなかつたが父親の分も作った。だから一通りのものは作れる。

15分ほどで手早くオムレツにベーコンを焼いたもの、サラダとコーヒーそれに

トースト……

「凄い……愛莉ちゃん、凄すぎ！ このサラダ・ポテサラまで付いてるよ？」

「どうやって作ったの?!」

「ジャガイモをレンジでチンして、潰しただけじゃん？ 後は塩・コショウ・マヨネーズ」

「こんだけをあの時間につて、やっぱり凄いよ」そう言われるとすごく気分が良かった。

美味しい美味しいと言いながら、慎二はあつと言つ間に平らげてしまった。

愛莉は幸せを感じていた。明日なんかずっと来なければ良いのにと思った。

その日は2人で、近くの大型ショッピングセンターに行った。鍋が食べたいと慎二が

言ったので、その食材を買いにである。

その前にCDショップや本屋などをブラブラとしていた時、不意に慎二がこう言った。

「あのさ……もし、もしもだよ……もう少し一緒にいてくれないか？」

つて言ったら困るかなあ？ 愛莉ちゃんが嫌じゃなかったらずっと居て欲しい。

勿論、束縛なんかしないし、嫌になったらいつでも出て行ってもいいし……」

愛莉はびっくりしていた。すごく嬉しかったが、真に受けても良いんだろうか？

すぐに気が変わったりするんじゃないだろうか？そんな事を考え

ていた。

しかし、そうになったらその時の話である。何も変わりはない。そう思った。

「いいけど・・・私なんか住み着いちゃってもいいの？」

「本当に？　ずっと居てくれるんだね？　ああ、愛莉ちゃん、大好き！」

そう言うなり愛莉をいきなり抱きしめてきた。ショッピングセンターの広場の大きな

クリスマスツリーの前である。

大勢の買い物客たちが一斉に二人を見た。

愛莉はボーっとイルミネーションの輝きを見ていた。涙でばやけてとてもキレイだった。

> i 3 2 9 6 — 5 3 3 <

:

:

:

第8話 ボレロ

ショッピングセンターの駐車場で、カートいっぱい荷物をトラックに詰めている慎二を

愛莉は不思議そうに見ていた。ほとんどが愛莉のために買ったものである。

パジャマ、枕、化粧品、部屋着……下着類まで、いったいいくら払ったのだろうか？

5時間近く買い物をしていた。結局、夜の鍋は中止で外食しようという事になった。

「明日は愛莉ちゃんの服を買いに行こう。君に似合うの選んであげるよ……そうだ、

美容室によつてからにしよう。楽しい」慎二はまるで着せ替え人形で遊んでいるように

幸せそうな顔をしていた。

「ねえ、ホントにわたし一緒に居てもいいの？ あなた何も知らないでしょ？ わたしの事」

「君だつて僕のこと何も知らないじゃない？ 話したければ話せばいいし、嫌なら今の

ままでかまわないよ」もしも慎二が過去の事を聞いたとしたなら、全部話してしまいそう

だった。それで嫌われたつてかまわない。一昨日までの自分に戻るだけだと思った。

でも言えなかった。もう少しだけ、この幸せのようなものを味わっていたかった。

その日、帰ってから洗面台の大理石の上に買ってもらった化粧品を並べてみた。

口紅以外は初めて使うものばかりだ。売り場の店員に教わったおりに化粧を試してみた。

全然上手くいかない。その時扉が開いて慎二が入ってきた。

「愛莉ちゃん……お化粧した事ホントに無かったんだ」絶対に笑いをこらえて

いるようにしか見えなかった。愛莉は恥ずかしさとカッコ悪さで、真っ赤になり黙り込んで

しまった。慎二は愛莉を抱きしめながら詫びるように話した。

「ごめん。笑うつもりじゃなかったんだ。明日美容室で教えてもらえばいいさ。」

お化粧しなくても全然可愛いんだから……」

「ごめんね……お化粧も出来なくて。買ったこと無かったから……」

「愛莉ちゃん、本当にゴメン……」そう言ってキスしてきた。ドキドキした。

愛莉の目を覗き込む慎二の唇は、腫れたように赤くなっていた。

塗り過ぎた愛莉の口紅が付いたのだ。愛莉はおかしくなって笑った。

翌日、午前中に慎二の知り合いがやっているという美容室で、カットしてもらった事にした。

結構混んでいるようだったが、予約してあったために直ぐに案内してくれた。

「あーら、慎ちゃんいらっしやーい。あら、かわいい子じゃない？どんな関係よっ。」

白状しなさいって」オネエ言葉は、慎二の知り合いだというケイトさんだった。

結構人気の美容師らしく、芸能人のお客さんも多いそうだ。

「バッチリ綺麗にしてあげるからまかせて！」そう言っただけで愛莉をイスに座らせた。

愛莉は少し胸に届くくらいに髪を切っていた。勿論、自分である。公園のベンチで適当に切っていた。

その髪の毛をケイトはためらわず首筋辺りでドンドン切っていた。

第9話 魔笛

「愛莉ちゃん、素敵じゃない。あなた美人ね。次はあ、頼まれてたお化粧の仕方

教え上げる」

鏡に映る自分は、見たことも無いくらいキレイだった。

「いいわね？まず下地から・・・あなたは肌がきれいだから・・・こうやって薄く・・・」

顔半分を自分で塗りながら教わった。約1時間半ほどですべて仕上がった。

「ほら、慎ちゃんにお披露目しなきゃ！はい。お待ちせう。ご対面よ」

慎二は驚嘆したように一瞬息を呑んだ。

「凄い・・・メツチャ綺麗・・・愛莉ちゃん？」そう言ったまま固まっていた。

周りの客達の、羨望とも嫉妬ともつかぬ眼差しが痛いほどだ。

ケイトにお礼を言って店を後にした。自分でもびっくりするほど綺麗になっていた。

不思議なもので、少し自信が出てきたような気分がする。慎二の車が地下駐車場に入り

車を降りてサイドウィンドウに映った自分を見た。華があった。

慎二とその後、色んなシヨップを廻り何着も買い物をした。

ブーツやヒールも買ってくれた。

「こんなコスプレっぽいのも好きなんだあ」そう言って持ってきたのは、ウエスタン風の

服だ。カウボーイのような帽子もセットで購入した。

その日はその格好で歩いた。自分でもびっくりしたが、何人もがすれ違いざま愛莉を見た。

中には振り返っている男の子達も居る。

「愛莉ちゃん、ホント君かわいいよ・・・なんか嬉しくなっちゃう。こんな美人連れて

歩けるなんて・・・」お世辞でも嬉しかった。

その後、彼がよく行く練習スタジオに顔を出した。プロのミュージシャンも使っているという

録音スタジオもある店G・Bだ。

「慎さん、お久しぶり！最近来ないから、また海外かと思ってたよ」「先月までニューヨークにいたんだ。そう言えばジェイミーに会ったよ。

ノリさん元気？って聞かれたから、アイツは毎日ファックしまくってるぜって

言っておいた」

「ひどいな」そんな事言ったんスかあ？　ところで・・・今日は新人歌手さん？」

この人が知り合いのノリさんらしい。少し無精ひげのあるオジサンだった。

年齢は50を少し廻っているようだ。業界では有名らしく、ドラマIでも結構忙しいという話だった。

「慎さん、たまにはセッションしようよ。聴きたいよなあ、慎さんのギター」。

そうだろ？・・・お前も何か言えよ？？？・・・こいつ、その子に見とれてますよ」

「あつ・・・図星・・・初めまして！ショータって言います。よろしくね！」

事務所の奥から茶髪の男の子が現れた。ここの店員さんでベースもやっってるらしい。

まだ18歳なのに、最近はプロのバックもやっているそうである。

「今日は暇だし、ちょっとやりましょうよ。祐君ちょっと店みてて」そう言ってお客の

男の子に留守番させ、2階のスタジオに4人で入って行った。
色んな機材が置いてあり、ガラス張りの向こうには録音設備も完備
していた。

「彼女、結構いいんだぜ。ちょっとブルースっぽいのもやってみる？」
ギターを持った慎二が、そう言ってカラオケで歌った曲を演奏しだ
した。

カムレイン・オア・カムシャイン・・・（晴れの日も雨の日も）以
前付き合っていた

直人が持っていたCDで、エリック・クラプトンとB・Bキングが
歌っていたのを覚えた。

何度も聴くうちに、何となく歌えるようになっていたのだ。

「じゃあ、キーはB で・・・リズムはこのくらい・・・ワン・
ツー・・・」

ノリさんのドラムから入り、慎二のギター、ショータのベースと続
いた。

C o m e r a i n o r c o m e s h i n e

参考URL <http://www.youtube.com/watch?v=p4HACtTqD4>

:

I ' m g o n n a l o v e y o u , l i k e n o b o d
y ' s l o v e d y o u

C o m e r a i n o r c o m e s h i n e

H i g h a s a m o u n t a i n a n d d e e p a s
a r i v e r

C o m e r a i n o r c o m e s h i n e

I g u e s s w h e n y o u m e t m e

I t w a s j u s t o n e o f t h o s e t h i n g s

B u t d o n ' t e v e r b e t m e

C a u s e I ' m g o n n a b e t r u e i f y o u

let me
You're gonna love me, like no body's loved me
Come rain or come shine
Happy together, unhappy together
And won't it be fine
Days may be cloudy or sunny
We're in or we're out of the money
I'm with you always
I'm with you rain or shine

演奏が終わった後、暫らくの静寂があった。

そして3人が愛莉に拍手を送った。

「マジかよ・・・慎さん。鳥肌たったわ。凄いね彼女・・・アイリちゃんだっけ？」

ノリさんが慎二にそう言っているのを聴いて、愛莉はすごく嬉しかった。

「ノリさん、クリスマスライブまだいけるかな？出演・・・」慎二がそんな事を言っ

ている。12月24日ある大きなホールを貸しきって、このGBスタジオのライブイベントが

あるらしい。そこで演奏するのだという。結構お客が入り、400人は来るらしかった。

その中にはバンドのメンバーや友人、音楽関係者など玄人が多いらしい。

そして投票でNo.1バンドを決めるとの事だ。

「勿論、空けるさ！俺がドラムで入ってやる。あと・・・ショータいいな？それと
キーボードは・・・カズだな。後3曲決めなくちゃ。アイリちゃん、何歌える？」

その日は、その後9時過ぎまでスタジオにこもっていた。
愛莉にとって初めての体験だった。

：

> i 3 3 0 4 — 5 3 3 <

第10話 無言歌集

翌日も二人はG・Bスタジオにいた。慎二が明日から海外へ3日間出張だから、どうしても今日練習したいと言っていたからだ。ライブイベントは土曜日。今日が最終の練習日だ。曲は一応アンコールを含め5曲やることにした。

オーダーは

1 Come rain or come shine

<http://www.youtube.com/>

watch?v=T6rgNdqv7kU

2 Georgia on My Mind

<http://www.youtube.com/>

watch?v=IumnmhnpJKQ&feature

e=fvw

3 You'd Be So Nice to Come Home

e To

<http://www.youtube.com/>

watch?v=0kb-yP4Msvk

4 All of me

<http://www.youtube.com/>

watch?v=7lz1oEqzORY&feature

e=related

ec, Without You

<http://www.youtube.com/>

watch?v=ssCR1Omma66c

どの曲も好きな曲ばかりだった。特に Without You を歌いきった後は気持ちいいほどスカッとした。ノリさんもショータも、それに今日初めて会った力

ズさんも皆上手だった。

慎二は、元はプロを志していた事もあつたらしく最高のバックが出来上がっていた。

「愛莉ちゃん、やつぱ凄いわ・・・ Without You なんか 涙出そうになったよ。」

今回は主催者のオレ様がNo.1いただきかあ？」ノリさんが笑いながら言った。

「それじゃあジョージアのイントロだけでもう一回確認して・・・愛莉はやつとく事無い？」

慎二がちよつと真剣な表情で話している。愛莉はドキドキしながら見ていた。

それにバンドの練習をしだして、愛莉、とちゃん付けしなくなっている、それも嬉しかった。

この日は5時間ほど練習し、打ち上げだといって皆で食事に出かけた。

近くの居酒屋だった。

「愛莉ちゃん20歳だったよね？家は近くなの？」そんな質問がショータから出た。

すぐに慎二がフォローしてくれた。

「彼女は僕がサハラ砂漠に行ったときに地引網にかかったんだよ。それで連れて帰って

きたんだ。税関が大変だったよ」

「慎さん・・・ツッコミどころ満載過ぎて笑えね～」全員大爆笑だった。

その後もメンバーのバカ話に涙が出るほど笑った。

こんなに笑うのは小学生の時以来だった。

家に戻ってから慎二のテンションは上がったままだった。

「愛莉。僕の愛莉。愛してる！最高だあ・・・ジョージアオンマイ・・・」

「慎二さん、近所迷惑じゃないの？そんな大声出して・・・」

「え、愛莉が言っかなあ。一昨日は玄関で凄い声出してたくせに

」

「意地悪だなあ・・・また・・・したくなっちゃった」酔っ払って
たせいだろうか？

急に慎二が欲しくなった。

・ 「愛莉、最高！」慎二は愛莉を抱き上げソファへ運んだ・・・

第11話 鎮魂歌

翌朝早く、慎二は小さなスーツケースを持って出かけた。

その際エントランスの暗証番号やPCのパスワードなどを紙に書いて渡してくれ、現金で

20万円とキャッシュカードを渡してくれた。勿論、暗証番号も教えてくれている。

自分がこんなに信用されている事実が嬉しい反面、過去の自分を彼が知り、また以前の

自分に戻る事への恐怖感も感じていた。

先週末までは週に一度、援助交際で手にしたお金で生活をし、ミッキーマウスの財布には

数十円しか入ってないこともあった。それが昨日買ってもらったピンのコインには

23万の現金が入っている。不思議な感覚だった。

その日は一日中、部屋の掃除をしたり洗濯をしたりした。久しぶりに「笑っていいとも」を

ゆっくり見たが、ゲストが誰だか全然分からなかった。翌日は慎二が選んでくれた服を着て

街を歩いてみる事にした。モトーンのワンピースに焦げ茶のニーハイブーツ・・・

どれも目にしたことはあったが、自分で着るなどと思ってもいなかった。栄の地下街に

着くまで何人かの男の子に声をかけられた。勿論無視したが少し気分が良いものだ。

お昼はレストランで1000円のランチを注文し食後のコーヒーも楽しんでみる。

すべてが初めての経験であり、夢のようだった。本屋で文庫本を買い、CDショップで

聴いてみたかったアーチストのアルバムを買ってみたり、普通の女の子なら当たり前の

ことを、まるで大切な思い出作りのように味わった。

夕方になり、そろそろ帰ろうとバス停に向かって歩いていて時急に二の腕をつかまれ

小さな悲鳴を上げた。

「愛莉？おまえ・・・愛莉だよな？」一瞬凍りついた。

以前付き合っていた直人がそこに居た。だいぶ雰囲気は変わりチンピラ風だった。

「てめー・・・あん時はよくも逃げてくれたなあ。おかげでヒデー目にあっただぜ・・・

元気そうだな？ 羽振り良さそうじゃんか」嫌なやつに会ってしまった。

愛莉はそう感じながら、あの裸足で逃げた朝を思い出していた。

身体が震えるのを感じながらも、その場から逃げる事ができなかった。

「なあ、ちょっと付き合えよ。最近やってねーんだ・・・それにしてもいい女になったな」

そう言つてグイグイ腕を引っ張られながら、横断歩道をの真ん中まで来たあたりで

愛莉は急に我に帰り、直人の股間を思いっきりブーツのつま先で蹴り上げた。

つま先が骨に当たる感触がするほど確実に急所に当たるのを確認した瞬間、直人は

その場にうずくまりながら何かわめいていた。何を言っているのか聞き取れないほど

直人との距離は開いていた。すぐさまタクシーに乗り込みその場を後にした。

後部シートで震えがなかなか収まらず、全身に力を入れやっと座っていることが出来た。

家に帰って直ぐに鍵をかけ、ソファで小さくなっていた。照明もエアコンのスイッチも点けるのを忘れていた。「慎二に会いたい……早く帰ってきて」心の中で

何度も叫んでいた。冬の夜の寒さを感じ、お風呂に入った頃、やっと気分が落ち着いて

くるのを感じていた。それと同時に有頂天になって人混みを歩いていた自分に腹が立ってきた。

「あの街で4年間も援交していたんだ……こっちが忘れてても向こうは覚えてるかもしれ無い……なんで栄なんか歩いたんだろう？」湯船に頭まで浸かりながら自分の愚かさを罵り続けた。

翌日は、夕方慎二が帰宅するまで愛莉は一步も外へ出なかった。

第12話 ノクターン

> i 3 3 1 6 — 5 3 3 <

インターホンの音がし、画面を見ると荷物をたくさん持った慎二が笑っていた。

扉を開け、玄関で待っているとエレベーターから慎二が現れた。涙が止まらなかった。

「どうしたの？ 何かあったのかい？」心配そうに慎二が言ったが、愛莉は首を横に振りながら抱きつくだけだった。

「会いたかった……」慎二はよしよしと頭を撫でてくれた。心が落ち着いてくるのを

感じながら慎二にお帰りのキスをした。

「はい、お土産！ たくさんあるからね」香港で買ったというお菓子やTシャツ、それに

アクセサリー類まである。昨日の恐怖はすっかり忘れて、二人で中身を開けて笑いあった。

食事の用意は愛莉が既にテーブルに用意してあった。ちゃんこ鍋を二人でつつきながら

慎二が香港の話をしてくれるのを聞いていた。

「愛莉も今度一緒に行こう。今回は接待だったから連れて行けなかったけど、次は一人で

行く予定だから……美味しい飲茶の店があるんだ。もう朝はあそこ以外に考えられない

くらいだよ。来月は……えっと、1月22日から3日間。??

そうだ！ どうせなら休日もいれて5日間にしよう。ついでに深しんせん？ にもよって仕事を片付けて……

中国本土も面白いよ。来週パスポートを取りに行こう」慎二の話を

黙って聞いていた。

夢のような話だった。わたしが海外へ行けるなんて考えてもいないことだ。

パスポートってどうやって取るんだろう？少し不安になったが、慎二に任せようと思っていた。

「それより、明後日のライブ楽しみだなあ、歌練習した？」

「うん・・・少しだけした」

「歌詞は完璧？」

「多分・・・大丈夫」

慎二がフォークギターを持ってきた。ちょっと練習のつもりらしい。5曲を歌い終わると丁度30分だ。

「演奏の前に僕がMC入れるから、終わったら愛莉が話してくれる？」

「わたしにできるかな？」

「愛莉ならきつと大丈夫だよ！自信を持って」そう言って頬にキスをしてくれた。

慎二がいれば何でも出来そうな気がする。それから昨日買ってきたCDを二人で聴いた。

Norah Jones ノラ・ジョーンズの新作だった。

「ノラ・ジョーンズ好きなの？そういえば愛莉の声少し似てるかな？ハスキーなところ。」

見た目はずっと可愛いけどね・・・愛莉の方が」

「ありがとう。好きっていうか・・・雰囲気だね。なんか良いの」肩に廻された慎二の腕に力が加わり、二人はそのままソファアの上で抱き合った。

「出張中もずっと愛莉の事を考えてたよ」慎二が耳元で囁く。気が遠くなるような感覚に

襲われながら、慎二から離れないように必死にしがみつき、何度も中で果てるように

懇願していた・・・

第13話 歓喜の歌

> i 3 3 2 2 — 5 3 3 <

ライブ当日は少し早めに会場に行き、機材のセッティングなどを手伝った。

黒いニットのタートルネックにジーンズを、作業用のつもりで着ていたにもかかわらず

関係者の人たちからスタイルがいいね、と言われた。

「あいつら、本番の衣装を見たら卒倒するんじゃない？」慎二が耳打ちした。

「慎ちゃん、3時からリハやるからヨロシクー。それと、打ち上げはもう予約してあるから」

「了解。シールド2本貸してくんない？忘れちゃった。ところで僕ら何番目？」

ノリさんと慎二がなれた感じでステージを作っている。見たことのない光景だった。

「照明チエックしたいんで誰か立つてもらえますか？」

「OK！愛莉ちゃんステージの真ん中に立つてもらえる？わりーネエ」

会場の後方からスタッフの呼びかけにノリさんが答えた。

まだ客席は明るいが、後方から3台のスポットライトが一斉に愛莉を照らし出した。

身体が浮き上がるような感覚と、何ともいえない興奮でドキドキする。

「ここで歌うんだ・・・」手のひらにうつすらと汗がにじむのがわかった。

1時からリハーサルが始まり、ロック系のバンドに混じり三味線とロックバンドを

足したような不思議なバンドも居た。愛莉たちの前はビジュアル系

のバンドで、もう直ぐ

メジャーデビューすることも決まっているらしかった。どのバンドもプロ顔負けの

パフォーマンスとテクニックだ。

愛莉たちの番が来た……

「じゃあ、リハ行きまーす！ドラム、スネア出してー」PAのスタッフが順番に

音量チェックしている。

愛莉の番が来た。

「はい、ボーカルさん2番のマイク使ってもらえますか？」慎二に教えてもらい

声を出してみた。

「あー……あー……」ドキドキした。会場で皆笑ってる……

「ドンマイ・ドンマイ……じゃあ、バック入れて歌ってみようか」ノリさんがそう言って
フォローしてくれた。

ピアノのイントロがながれた。All of me だ。
深呼吸しマイクに近づく……

All of me, why not take all of
me?

Can't you see I'm no good with
out you?

Take my lips, I want to lose t
hem.

Take my arms, I'll never use t
hem.

You're good-bye left me with e
yes that cry.

How can I get along without you?
You took the part that once was my heart,
So why not, why not take all of me?
All of me, come on, get all of me.
Can't you see I'm just a mess without you?
Take my lips, I want to lose them.
Get a piece of these arms, I'll never use them.
You're good-bye left me with eyes that cry.
How can I ever make it without you?
You know, you've got the part used to be my heart,
So why not, why not take all of me...?

(私のすべてをどうして奪ってくれないの?)

あなたがいないとダメだってことわかってるでしょ?)

<http://www.youtube.com/watch?v=I3Tp4Tk1law&feature=related>

歌い終わると暫らく会場がシーンと静まり返った。

「あれ？・・・ダメだったかな？」そう思い慎二の顔を見た瞬間、会場から拍手が

起こった。作業をしていたスタッフ全員こちらを見ている。

「あゝあ・・・ばれちゃった」ノリさんが笑いながら大声で言っていた。

リハが終わると色んな人たちが話しかけてきて、着替える時間が出来ないほどだった。

「愛莉、ひよっとすると今夜は君の人生が変わる日かもしれないよ？」

慎二が耳元で囁いている。

身体が解けてしまうのではないかというほど夢見心地だった。

第14話 花のワルツ

> i 3 3 2 8 — 5 3 3 <

開場は6時からで愛莉たちのバンドはラストから2番目だった。

最後は昨年の優勝バンドでメジャーデビューも果たしており、今回の審査は対象外だった。

コンテストの対象は合計8バンド。愛莉たちのバンド以外は事前に予選を勝ち進んで

来ている。愛莉はノリさんの特別枠だ。

今回、愛莉のバンド名はG・B・Eとなっていた。ステージ衣装を着、コートを羽織って控え室で待っていた。

部屋のモニターからステージと会場が見ることが出来る。

お客さんは既に満席状態だ。フルで450人と言っていたがそれに近いようである。

今回は地元のラジオ局も録音しており、後日放送されるらしい。

開場はドリンクや簡単な料理も販売されていて、皆クリスマスの夜を大いに楽しんでいる。

「愛莉、何か食べようか？」慎二が誘ってくれた。あまり食欲はないが会場も見えたかった

ので、一緒に行く事にした。2バンド目の演奏が始まっていた。口ツクだが少しJPOPを

意識した軽い感じの曲だ。

から揚げやコーラを持って歩いていると綺麗な女性が慎二に話しかけてきた。

「慎ちゃん、久しぶりー。元気だった？　なんか離婚したんだって？　もう皆そのうわさで

持ちきりよ。　そのうち立候補者が束になって詰め掛けるから、覚悟していて。

私もその一人だから」そう言いながら愛莉のほづをチラッと見た。

「すごく可愛いお嬢さん……まさか?……彼女?」すると慎二が肩を抱き寄せ

「紹介するよ。愛莉ちゃん。今一緒に暮らしてるんだ」

「あの……愛莉です。初めまして」そう言つとその女性はびっくりしたような顔で

「えー?!聞いてないよー。こんな可愛い子に勝てるわけ無いじゃん? ショッカー」

そう言いながら違うテーブルに歩いていった。その後も同じように慎二に何人かが

話しかけて来てはスゴスゴと退散していった。

「慎二さんモテるんだね?」

「そんな事ないよ。みんな気を使ってくれてるんだ。離婚して落ち込んでるって

勘違いしてるだけ。愛莉、やきもち妬いちゃう?」

「ぜーんぜん」そう言つて笑つてみせた。

さっきまでの緊張が全然なくなっていた。すごく気持ちよく歌えそうだ。

慎二に聴いて欲しい。慎二に褒めてもらいたい。そんなふうに思っていた。

何時間か経ち、フバンド目がステージに上がり演奏していた。次は愛莉たちの番だ。

また少し緊張してきた。

「大丈夫。愛莉が楽しめればそれでいいんだよ。上手に歌おうと思わないで……」

ほら、昨日の夜歌ったみたいに……アッチの話じゃないよ?」思わず吹き出してしまった。こんな時にそのジョーク?

「ばかつ。……」緊張が一気に醒めた。

「よし!行こうか。みんなに最高のクリスマスプレゼントを聴かせてやるっ」

ノリさんの掛け声でステージに上がった。

第15話 ジュピター

> i 3 3 3 1 — 5 3 3 <

:

オーダーはスタジオで練習した通りだ。アンコールは念のため予定曲ではない。

Come rain or come shineのイントロが流れた、本番だ。少しずつステージが明るくなってゆき、緩めのスポットが愛莉を浮かび上がらせた。

I'm gonna love you, like nobody
y's loved you
Come rain or come shine

歌いだすと何もかも見えなくなった。何年かの出来事が走馬灯のようには蘇りその最後に

慎二が腕をつかんでくれた。

まるで漂流しているようなわたしを、助け出してくれたのは横でギターを弾いている

彼なんだ。

ねえ、聴いてる？聴こえてる？わたしの想い。

あなたの事が好きよ。ずっと一緒に居たい。

雨が降った日も・・・晴れた日も。

歌い終わると涙が出ていた。

会場から大きな拍手と歓声が聞こえてきた。慎二がにっこりと笑って次のイントロを

弾き出した。最初はギターだけで何小節かブルースを奏で、愛莉が

入った。

Georgia on My Mind

Georgia, Georgia, the whole day
y t h r o u g h .

Just an old sweet song

keeps Georgia on my mind

わたしには故郷なんて無かった。嫌な思い出ばかりで帰りたくもない . .

でも、あなたに出会って、あなたがわたしの帰るべき場所だって気づいたの

わたしの故郷それはきつとあなただわ

拍手の中歌い終え慎二のMCが始まった。

「みなさん今夜は楽しんでますか？むさ苦しい男の話は要らない？
そう言わずに . . .

今夜は皆さんにプレゼントを用意しました。メインボーカル愛莉です！」

そう紹介され、羽織っていたコートを脱ぎサンタクロースのコスチュームの愛莉が

会場に向かって言った。

「メリークリスマス！」会場から大歓声が起こった .

> i 3 3 3 0 — 5 3 3 <

:

すぐにカズのピアノが入り You'd Be So Nice to
o C o m e H o m e T o のイントロが流れた。

You'd Be So Nice To Come Home
To
You'd be so nice by the fire
While that breeze on hight san
g a lullaby
You'd be all that I could desi
re.....
あなたの家に帰れる幸せ・・・
わたしが初めて経験した安らぎ
あの場所はまるで楽園・・・

曲が終わると直ぐにラストのAll of meが始まった。

All of me, why not take all of
me?
Can't you see I'm no good with
out you?
Take my lips, I want to lose t
hem.
Take my arms, I'll never use t
hem.
わたしにすべては全部あなたのもの
あなたが居なかったきつと死んでしまうわ
この唇も身体も全部あなたのもの・・・

歌い終わりじつと歓声を聞いていた。
鳴り止まない拍手。

慎二が近寄り、何か言っている・・・

「なに？聞こえないよ・・・」

「あいしてる」大歓声の中、慎二の唇がそう動いていた。

涙が止まらない・・・アンコールがかかってる・・・
カズのピアノが始まった。少しゆっくり目に弾いている・・・

Without You

<http://www.youtube.com/watch?v=ddcmY6CLEmUo>

No I can't forget this evening
Or your face as you were leaving

But I guess that's just the way
The story goes

You always smile but in your
eyes

Your sorrow shows

Yes it shows・・・・・・

中略

I can't live

If living is without you

I can't give

I can't give anymore

I can't live

If living is without you

I can't give

I can't give anymore

今なら素直に言えそう・・・

もしあなたが居なくなったら

そんな事想像もできなくなってしまったわ

あなたしか見えない

あなたしか要らない

あなたが居ない世界なんて想像できない

あなたが好き……

すべてを歌い終えても暫らく拍手が終わらない。
最後のMCを愛莉が入れる事になっていた。

「愛莉、大丈夫？」慎二がやさしく話しかけた。
コクリと頷きマイクを持った。

「今夜、ここで歌えた事を本当に感謝してます……ありがとうございます」
ざいました」

そう言つて深々とお辞儀をした。喝采の嵐だった……
慎二に抱きかかえられながら控え室に戻り、暫らく泣いていた。
嬉しくて、幸せで止まらない涙を始めて経験した。

「愛莉。素敵な夜をありがとう……」
そう言つて慎二がそつと抱きしめてくれた。

：

第15話 ジュピター（後書き）

何となく・・・ここでハッピーエンドみたいですが・・・
ここから物語の始まりみたいな・・・
ちよつと長めの前振りでした？

第16話 G線上のアリア

ラストのバンドが会場を盛り上げたまま投票が行われた。

ステージでは、ノリさんが来場者への感謝と各バンドへのねぎらいの言葉を述べていた。

「えー・・・それでは集計の結果がたようです。今回の優勝は・・・
・G・B・I。

申し訳ない・・・俺がやったバンドでした。という事で愛莉ちゃん
カモン！」

会場からいきなり呼ばれ、どうしていいのかわからずにいると慎二
がエスコートしてくれた。

「愛莉、おめでとう。君が取ったんだよ。この賞は」そう言ってス
テージまでを

寄り添って歩いてくれた。

「えー、ここに審査結果が書いてあります総票数421、無効0、
でG・B・I獲得票

377票！ ありがとうございます。多分みんなも気づいてる
と思うけど・・・

初めてステージに立った、このエンジェルが今回の主役でした。

愛莉です！」

スポットライト3台が一斉に愛莉を照らした。会場からはもう一度
大きな拍手が起こった。

去年の優勝者から花束が贈られ、レディオEXから記念品が渡され
た。

いったい何人の人たちと握手をしたかわからなかった。

終了後の会場にはS・Yエンターテインメントの人やレディオEXの
ディレクターが

愛莉を待っていた。是非CDを作らせて欲しいという話だった。

慎二に相談したら、勿論OKだよと言ってくれた。来週にはラジオ

局でインタビューを

受ける話まで決まった。レディオEXは元々EXTVの子会社であるため、多分近いうちに

テレビ出演の依頼が来るらしい。ノリさんがそんな話をしてくれた。

「愛莉ちゃん、有名になっても僕たちのこと忘れないでね・・・」シ

ョータがそんな事を

言ってみんなを笑わせようとした。

「まんざら冗談でもなさそうだが、S・Yの社長が是非会いたいつて言ってるらしい」

「マジっすか？ノリさん。あの社長滅多に動かないから・・・」ショータはびっくり

して言った。

G・B・Iのメンバーは近くの居酒屋に打ち上げに行く事にし、ライブ会場を後にした。

「それにしても凄かったなー今日は。音楽やってて良かったってつくづく思うよ」

ノリさんがビールを飲みながらそう言った。

「俺も鳥肌立つちゃって・・・ピアノ間違えそうになったよ」カズが頷きながら

チュウハイを一気に飲み干した。

打ち上げは結構盛り上がり、二人がマンションに戻ったのは午前3時前だった。

「愛莉、お疲れ。凄い一日だったね。来週から忙しくなるよ？ 楽しみだね」

「全部慎二さんのお陰だもの・・・今日の歌はすべて慎二さんに届け！って・・・」

そう思いながら歌ってたの。わたしあなたが大好きになっちゃった・・・怖いくらい」

「2年前、君に初めて会った日から君のことが頭から離れなかった・・・」

そう言つて慎二は愛莉を抱きしめた。

「わたしに・・・愛される資格があるのかな？　わたし・・・酷い生活してたの・・・

あなたに全部言いたい！全部知つて欲しい！　でもそれを言ったら・・・きつと

わたしを嫌いになつちゃう。それが怖くて・・・」

慎二は抱きしめたまま頷き、愛莉に優しく口づけをした。

「君が苦しいのなら・・・全部言つてごらん？　それを一つずつ僕がどこかへ捨ててきて

あげる。そして何も無くなつた君の心を僕で埋め尽くしてあげる」

愛莉は涙が止まらなかった。本当に全部話していいの？　心がそう叫んでいた。

それから二人は一緒にシャワーをし、お互いの身体を洗いあつた。

慎二に洗つてもらふことで、過去の自分が少しでもキレイになれるのではないか？

そう感じていた。

そして二人はベッドに入り、慎二の腕の中で愛莉は子供の頃の事から話を始めた・・・

慎二は静かに愛莉の人生を聞いていた。

第17話 エチュード

> i 3 3 4 9 — 5 3 3 <

:

「わたしね．．．高校2年の時に家出したの。それからずっと家に帰ってない．．．」

愛莉は少しずつ自分の過去を話し出した。

「高校に入ったその年に両親が離婚したの。元々仲は悪かったから、いつかそうなるって

思ってた．．．わたしが小学校4年生の頃までは仲良かったんだけど、父の勤め先が

倒産して再就職したら、お給料が少ししか無かったんだって。それで母が働き出したの．．

そこで好きな人が出来たみたいで．．わたしも一度会った事があったけど、母より

ずっと年下だったみたい。それでも小学校5年生までは7時ごろには家に帰ってきて

ご飯を作ってた。それが6年の頃には帰りが12時とかに．．わたしが洗濯や食事を

作ってた．．．」愛莉は淡々と話し続けた。それはまるで自分の過去を整理しているように

順を追って慎二に伝えていた。

「6年生になつて生理になったの。わたし知らなかったから、保健の先生に教えて

もらった。でも生理用品を買うお金が無かったの。母に相談したかったけど．．

その時は何日も外泊してて．．仕方が無く父に言ったの。それでお金を貰ってその日は何とかなった。

それから父は、わたしに生活費を渡してくれたの。いちいち言いにくい事もあるだろう

からって・・・食事の材料とか5万円もらってた。その時は優しかったの・・・」

その頃から愛莉の母親はほとんど家に居なかったという。家賃や光熱費などの引き落としは

父親の口座から支払っていたから、それほど不自由はなかったらしかった。

「父はよく働いていたけど・・・時々お酒を飲んで帰ってくると暴れるようになったの

すごく怖かった・・・だから、外で飲んでこないようにお酒の肴を作ったりして

家で飲んでもらうようにしてた・・・それがいけなかったんだ・・・」

その辺りから愛莉の口調は重いものになっていた。

「ある時、お酒のお酌をしていたら父に抱きつかれたの。最初は冗談かと思ってたけど

わたしの胸に顔を埋めて泣いてた・・・その時は父が可愛そうになつてきてそのままに

していたの・・・」

その後少しずつ父親は愛莉の身体を触るようになってきたらしい。

時には下着の中に手を入られた事もあったという。

「それでも・・・嫌だったけど父は優しくったからさせていたの。そのうち彼女でも出来れば

こんな事しなくなるって。母も時々家に居たし、それ以上父がエスレートする事も

無かったから・・・」

愛莉の母親は、たまに深夜に帰ってきては愛莉の布団で寝ていたという。

酒臭かったと言うから、多分水商売でもしていたのではないだろう

か？

「中学に入って、父の会社がまた倒産したの・・・それで暫らく無職で家に居たの

その日もお酒を飲んでわたしの身体を触ったりしてただけ・・・
だんだんエスカレートしてきて・・・わたし父の指で何度もイカされた・・・

自分でもなんでそうなるのか解らなかった・・・グッタリしてそのまま寝てしまつて

いた・・・そしたら、父がわたしの中に入ってきた・・・わたし何が何だか解らず

ただ暴れていたわ・・・座布団にたくさん血がついてた」

そこまで言つと、愛莉はわたしの胸の中で小さく震えだした。あまりにも卑劣な話に

腹が立つていたが何も言わず、ただ抱きしめ事実を受け止めた・・・

「その後月に何度か父はわたしの身体を求めた。すごく嫌だったけど、いつかきつと

昔の父に戻ってくれると目を瞑つて我慢していた・・・それでも自分の身体が父に

反応してくる様になつて・・・父を避けるようになった。自分が怖かったから・・・」

愛莉が拒絶するようになると、今度は力ずくで犯したのだという。

「ある時体の調子がおかしい事に気がついたの・・・病院に行つたら妊娠してるんじゃないか」

「それだと言われた・・・それで父について来てもらい・・・中絶した・・・」

それは愛莉が中学校3年生の時だったのだという。

自分の子供を妊娠させる親が何処にいるんだ？ 慎二の顔は怒りで真っ赤になっていた。

それでも黙つて愛莉の話聞いていた・・・

「その日からずっとお腹が痛かつたの・・・それで産婦人科で見て

もらったら・・・

子宮に異常があるって言われた。その時は治療してもらったけど・・・
多分子供は

産めないだろうって・・・」その後は泣きじゃくり話が出来なかった。
愛莉を抱きしめ何度もキスをし、一生離さない事を心に誓った。

第18話 交響曲

> i 3 3 5 5 — 5 3 3 <

:

次の日、私は仕事を休んだ。香港出張の事もあり会社には快く許可を得ることができた。

愛莉は朝食を作ると、それからの話を聞いて欲しいと言った。

私は黙って頷き、愛莉の横に座った。

外は雨だ。部屋には加湿器の音だけが静かに聞こえていた。

「わたしが妊娠出来ないと聞いて、父は暫らく落ち込んでいたけど・

・・・今度は

わたしの中で果てるようになった・・・朝方父に犯され、学校に行く时下着に精液が

いっぱい出てるの・・・それをトイレで拭いてると涙が出た。父も母も恨んできた。

高校に入り両親が離婚した時、わたしは後先も考えず母と住むと言った。母は喜んで

くれたわ。ずっとわたしに嫌われていると思ってたみたい。暫らくは貧しかったけど

普通に暮らしていた。わたしもアルバイトをして家にお金を入れてたの、それでも母は

夜遅くまでお酒を飲んで・・・全然お金が足りなかった。学校が終わって一生懸命

働いても月に5万円だった。家賃や授業料も滞納していたの・・・」母親は昼間働いていたそうだが、飲みに行くのが好きで、給料の大半をホストに

つぎ込んでいたらしかった。

「バイトが終わって家に戻ると11時過ぎてた。高校でも眠くて・・・ある日体育の

時間に倒れたの。念のために早退させられて家に帰ると母の喘ぎ声が聞こえた・・・

若い男の子と台所でセックスしてたわ。その男の子、わたしに見せ付けるように腰を

振ってた。結局その日はネットカフェで泊まった・・・」

そんな事があってから、その男が時々深夜にやって来ては母親とセックスをして

帰ったのだという。それが嫌で、愛莉は時々ネットカフェで泊まるようになったらしい。

「どこにも居場所が無かった・・・ネットカフェが落ち着く場所だった・・・

でも一晩泊まると1200円必要だったの・・・しかたなく家に帰り母の喘ぎ声を聞きながら

眠ったわ。でもある日、いつも引き出しに入れてあるバイト代が無くなってたの・・・

その月は何も引き落としが出来なかった。わたしの携帯代も滞納で、電話が使えなく

なった。その頃、携帯のサイトで知り合った仲間達とオフ会しようって話があったの。

わたしにとっては唯一の楽しみだった。その連絡も取れない・・・・悔しくて

ネットカフェに行って援助交際のサイトに登録した・・・そして20件も会いたいっていう返信があったの。その中で父と同じ年齢

の人がいたわ。別に理由は無かったけど・・・どんなヤツなのか見たくなくて・・・

待ち合わせしたの。三越の前で。普通の人だった。スーツ着たサラリーマン・・・

その人の車でホテルに行ったの。セックスは初めてじゃなかったけど、色んな事

させられた。それで帰りに3万円貰った．．．．．たった2時間で。

わたしが毎日バイトして11時まで頑張って月に5万よ？ 楽だった．．．．．」

その日から家には戻っていないという。そして愛莉は週に一度、援助交際をするようになったのだ。

「なぜ週一なのか．．．わたし多分セックスが好きなの。それで、自分が抑えられなくなるようにで怖かったの。一度本で読んだ事があった。セックス依存症．．．．．」

本当にお金が無くなった時だけ、身体を売ったのだ。携帯電話以外は何も必要なかった

から、下着や着替えをキャスター付きのバックに入れて歩いてたらしい。

「わたしが中に出してもいい、って言うと1万円余分にくれる人も居た．．．．

エイズとか知ってたけど．．．死んだってかわらないって思ってたから」

その後、直人と知り合い1年程居候していた事、ヤクザにまわされ逃げた事など

慎二が聞いていても、よく今まで生きてこれたのが不思議なほど、悲惨な人生であった。

慎二と出会ったのは直人と付き合っていた頃で、SMサイトは相場が高いと直人にさせられていたのだった。

「わたし怖くなかった人や、たくさんお金くれた人を携帯に登録していたの。

アドレス聞いたりして。2度目に会ってくれた人には中に出させてた．．．

そうすれば男の人、喜んでくれたの。また会いたいって・・・」
しかし愛莉の相手は、そんないい人ばかりではなかったようである。
「終わった後クスリを飲ませられて・・・気がついたらわたしだけ
ホテルに居た事も
あった」

他にも、2人で5万円くれるといった相手に車の中で犯されて、裸
で道端に捨てられた

事、一人だと思って部屋に入ったら、何人も居て1週間くらい監禁
されていたことも

あったらしい。愛莉の太ももに3cm位の傷があるが、それはその
時のもので、コップを

突っ込まれていて割れた時に付いた傷だという。そこから逃げ出し
た時は体中ボロボロ

だったようだ。肛門は裂け何日もトイレが地獄だったと・・・
話を聞きながら、何故もつと早く彼女を救えなかったのか？ 初め

て会ったときに見た
あの哀愁を帯びた瞳の奥の真実に、どうして気づいてやれなかった
のかと・・・

それでも彼女は生きていて、今ここで安らいだ生活を取り戻そうと
している。

私を愛し、頼ってくれている。これが神の導きであるなら感謝せざ
るを得まい。

すべてを聞き終え、私は彼女がここに居る奇跡を感じていた。

第19話 白鳥

翌週、愛莉と慎二はラジオ局にいた。平日という事もあって慎二の帰宅に合わせて

8時からの収録にもらった。音源は先日のライブのものを使うそうだが、一応

ギターを持って来て欲しいと言われていた。ひよっとするとスタジオで歌うかも？

そう思い、二人はライブでやらなかった曲を用意していた。

「なんだか緊張しちゃう。慎二さんは緊張しないの？」

「緊張するさ。見て・・・これ。手がベタベタ」そう言って愛莉に手のひらを見せてくれた。

愛莉はその手を自分の手でそっと包み込んだ。

「お二人ともありがとうございます！わざわざ来て頂いて・・・ちよっと収録前に

簡単な打ち合わせをさせていただきます」そう言ってEXレディオのディレクターが二人の前に座った。

「一応インタビューで聞く事がここに書いてありますが・・・本名とかはどうですか？」

CDデビューの話も先日聞いてましたんで・・・どうかなと？」

愛莉は慎二の顔を見た。自分の過去を考えて、言わないほうがいいのではないかと

思ったからだった。慎二は軽く頷き話し出した。

「まだ、芸名というか・・・そういったことまで考えて無かったんです。ただ、ライブ会場の人は全員知ってるわけだし・・・」

「それじゃあ、あいりーとか 伸ばしちゃうっていうのは・・・たとえばこう書いて」

そう言って机の紙に AILEYと書いて見せた。

「素敵・・・これがいいな、わたし」

「AIRYだと空気みたいだからしにしました。気に入っていただけるなら・・・」

「じゃあ、それで決めましょう。愛莉いいね？」

「慎二さんは？」愛莉がそう聞くと、慎二は本名でいいよと言っていた。

そして収録が始まった。愛莉は意外なほど緊張していなかった。

インタビューを人気DJのティム・カートンがしてくれた事もあるが、やはり本番に

強いのであろう。慎二はやはり少し緊張しているようであった。

「それでは・・・ここで何かライブと違う曲を聴かせていただけると言う事で・・・」

ギターは吉川慎二さん、ボーカルはAIRLYさん よろしくお願ひしマース」

ティムが英語なまりで紹介した。

Don't Know Why

<http://www.youtube.com/watch?v=5NDUj-MyVYA>

5NDUj-MyVYA

この、ノラ・ジョーズズの曲は、愛莉の大好きな曲である。

ティムもうつとりとした表情で聴いていた。

「すばらしい！ やっぱり生で聴くと凄くイイですねー。次回のライブとかは決まってるんですか？」

「いや・・・まだ何も決まっていなんです・・・あのステージで初めて人前で歌ったんです」

「オー・・・信じられない！・・・是非・EXレディオの新春ライブで歌って下さいよ。」

出演アーティストは・・・えっと・・・」そう言って、テレビで

お馴染みの歌手や

バンドを読み上げた。その中で歌ってくれというのである。

ここで一旦、録音を中断しディレクターと話し合った。

「お二人がOKなら是非出演していただけませんか？1月の3日・
・生放送です。」

会場はセントラルパークの特設ステージで、テレビ中継も入ります。
お二人で出て頂いて

もバンドでも大丈夫です」慎二は愛莉と少し相談し、了承した。

「それでは、お二人の出演がたった今、決定いたしました！是非お
聴きの皆様も

1月3日はセントラルパーク特設ステージにお集まり下さい！」

収録は約1時間だった。これをカットして30分で放送するようである。

帰りの車で愛莉が言った。

「出演する人たち・・・全員知ってる。あの中で歌えるの？」

「そうだよ。僕もびっくりした。まさかこんな話になるなんて・・・

・
・

当然、愛莉の過去を知っている人間も目にする事があるだろう。

それがとんでもない事件になる事は、まだ二人は知るすべも無かった。

第20話 動物の謝肉祭

その年の大晦日の夜、慌ただしく過ぎた愛莉と慎二の数週間を癒すように、しんしんと

雪が降っていた。名古屋での今年初の積雪は、20cmにもならんばかりであった。

「ねえ、雪が積もってきたよ。キレイねー……慎二さん見て、アレ……ちびっ子が

雪だるま作ってる。そんなに積もってたんだ……」

グレーのタートルネックのセーターを着た愛莉を、後ろからそっと抱きしめながら慎二が囁いた。

「今年一年は何もいい事がない、と思っていたけど……最後に愛莉と出会えてホントに良かった。来年も……いや、これからずっと先まで一緒に居よう……」

「わたし怖いのに……慎二さんが優しくすぎて、こんなに幸せすぎて……今にきつと

バチがあたるんじゃないか？って……」慎二は愛莉の頬にそっと口づけをし、力強く

抱きしめて言った。

「結婚しよう……」

その言葉を聞いて愛莉の身体は小さく震えていた。

「わたしも……慎二さんと結婚したいよ。ずっと一緒に居たいよ……」

でも……わたしにはそんな資格がないの……言っただしょ？子供もできないし、誰とでも

寝たのよ。結婚なんて無理なの……」愛莉は咽ぶように泣きながら慎二にしがみついた。

「すべて分かってて言ってるんだよ。これからは僕が君を護る。でも、もし僕が苦しい時は君も力を貸して欲しい・・・そうやってお互いに助け合って生きていこう。」
君を大切にするよ・・・結婚しよう」愛莉は泣きながら頷いていた。

「あけましておめでとうございます！」スタジオG・Bに顔を出すいつもの

メンバーが集まっていた。今日は新年会を兼ねた練習であった。

明日のセントラルパークのライブに出演してもらうよう、慎二が頼んだのであった。

メンバーの返事は勿論OKだった。彼らにとってもテレビ出演は当然チャンスである。

特に若いショータや、カズは乗り気であった。

「それじゃあ、酔っ払う前に練習しようか。曲は前回と同じで、アンコール用に

ちよっとパワフルな曲を入れようかと思って・・・これなんかどうかな？」

そう言つて慎二がノリさんに楽譜を渡した。

「MOVE OVER?・・・ジャニスの曲じゃないか?こんな歌える・・・彼女?」

「愛莉が選んだんだ・・・僕もまだ聴いてない。どうなるか・・・」
MOVE OVERはJANIS JOPLINの曲でもパワフルなボーカルでお馴染みである。

とにかく一度やってみようという事で、早速5人はスタジオに入った。

それぞれが一度譜面に目を通すといきなり演奏がはじまった。

move over

<http://www.youtube.com/watch?v>

"c3WtKeF2sys&feature"related
You say that it's over baby, L
ord,
You say that it's over now,
But still you hang around me,
you come on,
Won't you move over.....

私は愛莉の本当の凄さを知って、愕然とした。

演奏しながらもその迫力の歌唱力は私だけでなく、バンド全体を飲み込んでいた。

この子は、僕らの演奏ではとても太刀打ちできないのかもしれない。

・・・

嬉しいような寂しいような、そんな複雑な心境であった。

演奏が終わって、皆の顔はひきつっている。

それから約2時間ほど練習し、何とか愛莉の迫力に負けないような演奏が出来た。

「明日の本番は思いっきり行こう。今日は前祝だ！」その後、深夜まで宴会は続いた。

第21話 月光

当日リハーサルは9時からだった。簡単な音出しと、機材のチェック程度なので問題なく

終わり、他の出演者と挨拶をしたりしていた。テレビでよく観るビジュアル系のバンドを

含め、総出演者12組によるロングライブである。終了は夜の10時だ。トリは

すでに神話化されているアーティストのアカースティックライブがあるという。

愛莉たちのバンドは1時からで、5組目の演奏である。一組目が既に演奏している。

フォークデュオでヒット曲も多く、メドレーの中には、愛莉も何曲か聴いた事のある

メロディーがあった。

観客は無料という事もあり、既に3000人は集まっていた。

「凄いお客さんだな・・・3時のAKLの時には7〜8000になるんじゃないか？」

AKLはビジュアル系のバンドで最近特に注目されている。

「それにしても、化粧してるバンドのヤツらって、待ち時間は大変だな。目立ちすぎて

こうやってたこ焼き食べに、外に出る事もできない」

「ノリさん。それは俺たちが有名じゃないから出るんですって」

そう言ってショータが

突っ込みを入れた。

「ひよつとすると愛莉・・・いや、AILYもこれからは、たこ焼きが食べられなく

なるかもしれないよ？ なあ、慎さん」ノリさんはビール片手に上機嫌である。

「なんか緊張してきたなあ・・・そろそろ着替えてこなくちゃ・・・」

「愛莉の衣装は超ミニだから、まだ寒いんじゃない？ギリギリでいいと思うよ。それよりライブ観ないのかい？」

「慎二さんは観ないの？わたし、あんまり人が多いところ苦手だから・・・」

愛莉は先日の直人との事があって以来、極端に人混みを嫌がっていた。自分の事を

知っている連中に会う可能性は極めて高いのである。それは、愛莉が忘れていたとしても

向こうは覚えているということだ。愛莉は何人かの客に自分の中で果てさせた事がある。

もしそんな行為を女子高生にしたならば、相手は強烈な印象を持つに違いなかった。

慎二がそうであったように・・・

外では4番目の演奏が始まっていた。昼時という事もあって会場は5000人近い観客が

居るようである。外の気温は16度ほどあり、冬としては暖かいほうであるためコートや

ブルゾンを手を持っている人も多かった。

「じゃあ、そろそろ着替えます」そう言っただけで愛莉は控え室に入ってしまった。

15分ほどして出てきた愛莉を見て皆が一斉に感嘆の声をあげた。サテン生地のブルーのワンピースに白いファーコートを羽織っていた。

見事に伸びた脚は、男性を釘付けにしそうである。

「いや〜カメラ持ってきてくしゃよかった・・・」ノリさんがデレデレしながら言った。

「じゃあそろそろ用意しますか。ギタリストにはこれが必需品です

から「慎二は

ポケットから使い捨てカイロを用意しながら愛莉を見ていた。

会場から大きな歓声が聞こえた。4バンド目が終了したようである。スタッフが機材の

セッティングを始めた。いよいよだ。

「それじゃあ皆さん、よろしくお願いします」愛莉がペコリと頭を下げた。

「こちらこそ。また楽しませてもらうよ。バックは任せてくれ！」

ノリさんの力強い

言葉に一同ホツとした。さすがにプロ暦が長いだけの事はある。

ステージに出ると、そこはまったくのアウエーである。有名バンドの中に唯一の素人

それも、アマチュアとしてもまったく活動していない愛莉の登場は、観客達からすれば

中休み程度の感じであろう。3時からの本命バンドの為の場所取りに近い意味合いだ。

・・・・You'd Be So Nice to Come Home To・・・

ちよつと長めのイントロで、バンド全体の音量調節をする事になっており、ノリさんが

軽くドラムソロを決めた。さすがにキャリアもそうだが、テクニクがハンパではない。

今回出演のミュージシャンでもここまで叩ける者は居ないであろう。観客もそのグルーブ感にはさすがに驚いたようで、少し会場が静かになった。

そこへ愛莉のボーカルが入った。出だしは好調だ。ギターのアドリブに愛莉が絡む。

音程・ノリ共に最高である。少しずつ観客が注目しだしたのがわかった。

1曲目が終わりそこその拍手である。その音は2曲3曲と次第に大きくなり

Without Youが終わった頃には最高潮に達していた。

本来ならアンコールは無しである。1〜4バンドはそうであった。

しかしステージから

降りて5分、拍手が鳴り止まなかったため司会者が急遽愛莉たちをステージに呼んだ。

「それでは特別にもう1曲歌っていただきましょう！ AILEY & G・Bの皆さんです！」

強烈なドラムのビートから曲が始まった。

・・・MOVE OVER・・・

出だしから観客を圧倒していた。そしてギターソロになって愛莉が踊り出すと会場総立ちで踊っているではないか。慎二はアドリブを弾きながら鳥肌が立っていた。

それにしても、愛莉のグループ感は何処で身についたのであろう？ この踊りも見たことが

ないパフォーマンズだ。誰かの真似ではなく、身体の中から出て来るリズム・・・

演奏が終わって司会者がもう一度アイリーAILEYと紹介し、観客を盛り上げた。

さすがにこれ以上時間を押すわけにはいかず、観客のアンコールも落ち着いてきた。

控え室に戻るとスタッフ全員から拍手があり、また是非一緒にやりましょうと熱い要望を

言っていた。大成功だろう。

愛莉が少し涙ぐんでいるのがわかった。

第22話 スケルツォ

愛莉たちが後片付けをしていると、EXレディオの村上が人気DJのティム・カートンと

もう一人男性を連れて入ってきた。EXTVの澤田というディレクターで、ティムの担当

する新番組のアシスタントになってももらえないか、という話を持ってきていたのである。

なんでも30分の音楽番組で、国内外のアーティストをゲストで呼んではミニライブをやる

ということらしい。愛莉はそのバンドに加わり1曲スタンダードナンバーを披露する。

初回のゲストはステイプ・ロール率いるGATだ。ステイプはギター小僧から神呼ば

わりされており、初回の視聴率もそこそ取れそうだという話である。

愛莉はためらっていたが、慎二がのやつてみるべきだという言葉に押されて出演を決めた。彼らが帰ると今度はAKLのメンバーが挨拶に来た。愛莉の歌を聴き感動してどうしても

話がしたかったらしい。

ショータがサインを貰っていた。彼女が大ファンらしい。

その日は慌ただしく一日中挨拶をしていた。次の日になっても状況は変わらなかった。

取材の申し込みの電話が慎二の携帯に何度もあり、その都度愛莉のスケジュールを

決めていた。

「これじゃ愛莉のマネージャーだな？」慎二が笑いながらそう言った。

慎二は嬉しかった。虐げられ不幸だった少女が自分と出会い、キラ

キラと輝きだして

羽ばたこうとしている。それを見守っている心境であった。

正月の休暇も終わり、慎二が会社に出勤しだすと愛莉の生活はほとんどマンションから

出ない、引きこもりの様な状態になっていた。外出といえば近所のスーパーへ行く程度で

それも3日に一度だった。それでも愛莉の生活は満たされていたし、来月からは

EXTVへの出演も決まっていたので、幸せという言葉以外に思いつく言葉は無いほどであった。

それに22日から慎二と一緒に香港・中国深^{しんせん}？にも同行する事になっていた。

「愛莉、明日はパスポートの申請に行くからね。その前に住民票とか色々あるから・・・」

「ごめんね。全部慎二さんに任せっぱなしで・・・」

「愛莉、もういい加減そのさん付けはやめない？慎二って呼び捨てでいいよ。そのほうが

愛されてるって感じだし・・・」

「わかったわ、慎二さ・・・あっ、・・・慎二」そう言って愛莉は少し顔を赤らめた。

第23話 春

> i 3 6 2 0 — 5 3 3 <

・

1月22日は晴天に恵まれ、この季節にしては暖かった。

中部国際空港、通称セントレアは愛莉と慎二を祝福するかのように迎えてくれていた。

仲の良い二人を見てみると新婚カップルのようである。

「慎二、なんだかドキドキしてきちゃった。だって、飛行機に乗るの初めてなんだもん」

「そうそう、言い忘れてたけど搭乗するときは靴を脱がなきゃダメだからね」

「えー、ブーツにしなきゃよかった・・・脱ぐの面倒なんだもん、これ・・・」

「うそうそ、冗談だよ。」

「ひどーい！ 馬鹿にしてるでしょ？ 慎二のバカ！」

そう言って愛莉は慎二の胸を軽く叩いた。

3時15分発のキャセイパシフィック香港行きは、既に登場手続きを受け付けていた。

今回の慎二の出張は22日～24日の予定であるが、愛莉との旅行も兼ねているので26日

の日曜日まで滞在する事になっている。愛莉に中国本土も見せてやりたかったので、香港から

船で深しんせん？に渡り、そこで1泊して遊ぶ予定である。

「深？によく行く海鮮料理店があるんだ。日本には輸入されてないエビや魚が食べられる。」

いつもはお客さんを何人か連れて行くんだけど、二人で食べきれるかな？」

「大丈夫、わたしに任せて。結構食い溜めしてきてるから・・・」
「そういえば 以前、焼肉食べた時もすぐ食べてたよね。あれもそう？」

「覚えてるの？ 恥ずかしい・・・あの日は朝から何も食べてなかったの。お財布には

1000円位しか入ってなかった。慎二が食事に誘ってくれた時、飛び上がるほど

嬉しかったんだ・・・」

「愛莉・・・一生そんな思いはさせないから。僕が君をを護るから」慎二は愛莉の肩に

廻していた腕に力を加え、自分の方へ引き寄せた。

香港に到着してホテルのチェックインを済ませると、二人は街に繰り出した。

夜ということで若干気温は下がってはいるが、それでも20度近くはあるだろうか。

日本から着てきた服を、二人とも薄手の物に着替えていた。

「愛莉の夏服って初めて見たよ。よく似合ってるね」香港に到着して直ぐに空港の

ブティックで買ったものだ。日本ではまだコートの要る季節である。さすがに国内で夏物を調達するのは難しかったし、買い物も香港での楽しみの一つである。

「明日は色んなお店で、愛莉に似合う服をたくさん買おう。丁度バレーゲンの季節だからね」

「慎二さん、この前からずっとわたしの物ばかり買ってる。そんなに買わなくていいよ

お金たくさん使わせちゃってるし・・・」

「全然平気さ。夜まったく飲みに行かなくなったんだ、その分だけでも結構な金額だった

から・・・それに愛莉は何を着てもキマルから選ぶのが楽しくて」
そう言っ愛莉の

ワンピース姿をまじまじと見た。

二人は広東料理のレストランで食事をした後、蘇豪のジャズバーに出かけた。

客は中華系の人より白人が多く、英語が飛び交っていた。偶然にも今度愛莉とテレビ出演

する事になっているステイブ・ロールが客として来ていた。慎二もギターをやっている

のでステイブの事は知っているし、CDも2枚持っている。元々はカントリー出身だがロック系のバンドを転々とした後、GATというメタル系のバンドを結成した。

速弾きだけではなく音楽センスもかなりのもので、映画にも時々参加しているようだった。

愛莉たちとの席が近かった事から慎二が話しかけると、気さくに答えてくれた。

「あなたのCDを持っています。お会いできて光栄です」

「ありがとう。君たちは日本人かい？今度日本のテレビに出演するんだ。是非観て欲しい。日本の可愛い女の子と競演するそうだ」

「知ってます。彼女がその相手のAILYです。本当に偶然ですね。・・」

暫らくステイブは絶句していた。そしてこう言った。

「こういう事はよくある。人生には出会うべくして出会うことが何度もある。今日が

その日だ！乾杯しようじゃないか。アイー・・・。??」

「愛莉です」愛莉が握手を求め手を差し出すと、大きな両手でそれを包み込んで言った。

「It's an honor to meet you, Ms. AILY!」

それから3人は同じテーブルで2時間近く話し込んだ。勿論、通訳は慎二がしていたが、楽しい時間であった。帰りかけに何か1曲一緒にやらないかと言っ

てきたので、ステージの

楽器を借り演奏する事にした。店員や客達も、彼がスティーブ・ロ
ールだと知ると大歓声であつた。軽く打ち合わせをし、慎二がベ
ースで参加しRoute 66をやることにした。

ドラムには専属バンドのディックが参加した。長めのイントロは、
スティーブの

スーパープレイが散りばめられ、改めて世界レベルを体感した。愛
莉もだんだんノツて

来ている。そして歌が始まった。

Route 66

<http://www.youtube.com/watch?v=dCYApJtsyd0>

Well if you ever plan to motor
west

Just take my way that's the hi
ghway that's the best

Get your kicks on route 66

Well it winds from chicago to
l.a.

More than 2000 miles all the w
ay

Get your kicks on route 66

Well goes from st. louis down
to missouri

Oklahoma city looks oh so pret
ty

You?ll see amarillo and gallup,
new mexico
Flagstaff, arizona don't forge
twinona
Kingman, barstow, san bernadino
Would you get hip to this kind
ly tip
And go take that california tr
ip
Get your kicks on route 66

You?ll see amarillo and gallup,
new mexico
Flagstaff, arizona don't forge
twinona
Kingman, barstow, san bernadino
Would you get hip to this kind
ly tip
And go take that california tr
ip
Get your kicks on route 66

スティープのアドリブも冴えており、20分近く演奏していただろ
うか。

愛莉のダンスとギターとの掛け合いが客に受け、店は最高の雰囲気になっていたが、明日ヨーロッパに早朝から出発するスティーブが、これ以上無理だと笑いながら言ったので

この演奏は1時過ぎでお開きになった。スティーブは日本での再会を楽しみにしていると

言って店を出て行ったが、愛莉はその後店のバンドたちと3曲歌い、客の拍手を独り占めしていた。

帰り際、店のマネージャーが是非また来店して欲しいと愛莉のサインをねだってきた。

愛莉も初めての経験だったが「A I L Y・f r o m j a p a n」と丁寧に書いていた。

代金を払おうとすると、マネージャーはそんなもの必要ないと受け取らないばかりか

「あなた達は何時この店で飲んでもらってもタダです。ただし・・・1曲だけでも

歌って欲しい」そう言って笑っていた。

帰りのタクシーでも愛莉は上機嫌だった。

「慎二、香港大好きになっちゃった。この町に住みたいよ」少し酔いが回っているのか

それつが微妙だが慎二は嬉しかった。愛莉なら世界中何処だって連れて行ってやりたい。

そう思っていた。

「アメリカもいいところだよ。もっとドキドキするかもしれない・・・きつと行こう」

「慎二と一緒に何処にだって行けそう・・・」愛莉はそう言っ

て慎二に抱きついた。タクシーのフロントガラスには、その日宿泊するアイランドパシフィックが浮かび

上がっていた。

第23話 春（後書き）

第24話 ラプソディ・イン・ブルー

「でも、まさかスティープと演奏できるとは思わなかったなー。これも愛莉のお陰だよ」

慎二は感慨深げに窓の外の夜景を見ていた。世界でも名だたるスーパーギタリストに

偶然にも会った事は、愛莉と出会ってなければ在り得なかったかも知れなかったし、もし

見かけたとしても一緒に演奏するなど夢の話だったであろう。これからの自分の人生も

愛莉と同じく、大きく変わってゆくような気がして武者震いがしていた。

「慎二、ベースも弾けるんだね。びっくりしちゃった。それに英語も上手だし・・・」

わたしも勉強しようかなあ」

「愛莉がその気になったんなら、何時でも教えてあげるよ。あれだけ英語の歌が歌えるんだからきっと簡単だと思うよ。そうすればアメリカで歌うことだってできるし」

「うん。頑張ってみる。慎二と一緒になら何だって出来そうな気がするの。慎二に出会えて

よかった」愛莉は元々頭のいい子だった。高校受験も、ほとんど勉強という勉強はせずに

進学校に合格していたし、歌っている歌詞にしたってCDを何度か聴いて歌詞を見れば

歌えるようである。

「じゃあ、明日の買い物は愛莉に会話をしてもらおう。僕が教えるように話せば大丈夫だから」

「えー、いきなり明日からなの？ 先生優しく教えてね」

「先生かあ・・・悪くないな。じゃあ愛莉君、先生の言う事は聞くように。服を脱がしてくれるかな？」

「もう・・・先生エッチなんだから。それじゃあジッパー下ろしまゝす」

二人の香港での初日はまだ終わりではなかった・・・

旅行からから帰ってきた二人は、EXTVの打ち合わせに来ていた。収録は2月の12日

だが、その前に演奏する曲を決めたり、当日の衣装の打ち合わせなどであった。

二人は香港でステイプに会った事は、あえて話さなかった。収録当日その方が盛り上がるような気がしていたのと、スタッフに気を使つての事だった。ただでさえ新番組という事もあって大変なところに、初回が大物アーティストであればその緊張度合いもかなりである。

そんな所に余分な情報を入れるのも悪いような気がしていた。

その日は大体のプランが決まり、演奏曲はHound Dog。勿論エルビスの名曲だがアレンジは

当日ステイプが考えるらしい。香港でのプレイを見るかぎり、かなり期待が出来るだろう。

テレビ局の帰りに久しぶりにG・Bスタジオに顔を出した。ノリさんは相変わらず

ビール片手に受付をしていたが、二人を見るなり奥からなにやら持ち出してきた。

「ほらこれ、先日のセントラルパークとその前のライブのDVDだ。なかなか上手く撮れてるわ。ちよつと愛莉ちゃんのパンツが映ってつけど・・・これ、売れるんじゃない？」

「えー、そんなアングルから撮ってたんですかあ？ 早く観たいな

あ
」

「Aスタ使って良いよ。今日は暇だし。50インチのモニターテレビあるから。後で誰か来たらビール持って上がるよ。晩飯はピザでいいよな？」

「ノリさん相変わらずだなー。じゃあ先に上がって観てます。ありがとう」

「わたしここ大好き。なんだか落ち着くわ」階段を上りながら愛莉が楽しそうに言った。

このスタジオは、ノリさんのファンや仲間達が音楽を語り合ったり一緒に楽しんだりする

レンタルスタジオという領域からは超越した場所だった。夕方になれば高校生達が用も

無いのに集まってくるし、夜は会社帰りのバンドマンがつまみ片手に集まってくる。

プロのドラマーであるノリさんの演奏と、人柄に惚れて集まった仲間達だから意気投合

するのも早い。あちらこちらで自然にセッションが始まったり、音楽談議に花が咲く。

「京都に、落柿舎らくししゃという松尾芭蕉の弟子だった向井去来むかいきょの住処があるんだ

けど、その雰囲気に近いんじゃないかな？ 今度愛莉を連れて行つてあげるよ」

「行ってみたい・・・京都も行った事が無いんだあ。中学の修学旅行は行かなかったから」

「一緒に人力車に乗ったり・・・きっと楽しいよ」愛莉に色んなところを見せてやりたい

慎二はそう思った。

Aスタの設備はそのままちよつとしたレコーディングが出来るくらい整っており、音響は

最高である。DVDをセットし皮のソファに腰をかけると、先日

の演奏が大音量で流れてきた。カメラは2台で一台は会場後方から、もう一台は客席からのようである。

確かに、愛莉のサンタクロースのコスチュームがかなりきわどいアングルだった。

ミニスカートからブーツまでのすらっと伸びた脚がキレイだった。

暫らくしてノリさんが

ビールとピザを持って現れ、その夜は2時近くまで楽しい時間が続いた。

第25話 バイエル

EXTV収録当日は、慎二が東京に出張していたため愛莉一人で局入りした。

メイクや衣装は局側で用意してくれているので、白いセーターに皮のミニスカートと

それにファアのコートを羽織ったラフなスタイルで受付を済ませ、5階の打ち合わせ室に

入ると、中に居た数人が一斉に愛莉を見てため息をついた。

「いやあ、お待ちしました。愛莉さん、そのままでも収録出来そうですね・・・こちらに

どうぞ。　こっちが衣装担当の鈴木と彼女がメイクの松井です」

「よろしくお願いします。愛莉です」

「ど、どうも・・・すつ、鈴木です」妙に緊張している鈴木を見てメイクの松井が

「もっとキレイにするから　後でびっくりしないでよ？」そういつて笑った。

すでにステイプとGATメンバーも局入りしており、13時20分にスタジオ入りする

そうである。愛莉は香港での楽しかったひと時を思い出し、またあの演奏で歌えるのを

ワクワクしながら待っていた。

簡単な台本を渡されたが、ほとんど司会のティム・カートンがリードしてくれるようである。

ある。愛莉も香港以来、慎二に英会話のレクチャーを受けていたので、挨拶程度は出来る

ようになっていた。スタイリストがOKを出しスタジオ入りすると、スタッフから拍手が

起こった。その華やかさはアシスタントというにはオーラがありす

ぎたのだ。

ステージで音のチェックをしていたステイブが、愛莉に向かって手を振っていた。

「オー・AILEY！オヒサシブリデスネエー」なんと日本語で話しかけてきたのだった。

「ハイ・ステイブ！」愛莉の言葉にスタッフ一同何が起こっているのか分からず、

ポカンと二人を見ていた。

「ステイブ日本語覚えたの？」

「AILEYとお話するため 少し勉強しましたよ」そう言っただけでハグしてきた。

「今日は楽しみましょうね」

オープニングはGATのライブで3曲演奏し、ティム・カートンと愛莉がバンドメンバーと

トークをするコーナーのあと愛莉が参加して Hound Dog をエンディングまでやるというプランである。

演奏の収録が先に行われ、まずはGATが最新リリースから2曲演奏し、大ヒット曲を

1曲やった。さすがにどの曲もワンテイクで決め、即座に愛莉との競演のリハーサルをする予定だった。ところが、ステイブがAILEYならリハは要らないと一発撮りを指示したのでスタッフは焦った。まだ愛莉にアレンジ譜を渡していなかったからである。

とりあえずディレクターがOKを出し、カメラが回った。ドラムとベースの音が鳴りいきなり歌が始まった。

Hound Dog

<http://www.youtube.com/watch?v=X5JALwwASg>

You ain't nothin' but a hound
dog
Cryin' all the time
You ain't nothin' but a hound
dog
Cryin' all the time
Well, you ain't never caught a
rabbit

And you ain't no friend of mine
When they said you was high-cl
assed
Well, that was just a lie
Yeah, they said that you was h
igh-classed

Well, that was just a lie
Well, you ain't never caught a
rabbit
And you ain't no friend of mine

愛莉のキーは香港での事でわかっていたので、ステイプが既に合
わせていた。

しかもギターと愛莉のダンスが絡めるように、立ち位置まで絶妙に
考えてくれている。

さすがに世界の大舞台を何百もこなしているだけある。しかも7分
の予定時間ぴったりに

演奏を終えるなど、最早神業に近かった。これにはスタッフも大喜
びで、無事にライブ収録を完了した。

トークタイムはティム・カートンのギャグも冴え、愛莉も結構英語

で喋っていた。

収録を終えプロデューサーやディレクター、それにティムと愛莉を含めGATメンバーと

食事会に繰り出す事になった。場所は栄の居酒屋だ。ここは手羽先が有名な店で全国から

その噂を聞きつけ、有名人が訪れている。この日もスティーブが店に入るや数人が挨拶に

来ていた。その中に日本屈指のギタリスト八神竜也も居た。彼は何度かスティーブと競演

しており随分親しそうである。

「ミスター・スティーブ。そちらの美人はどちら様？」八神が聞いてきた。

「ノーノー。彼女はダメよ。素敵なダーリンが居るからね。ボクもファンだけど

ガツカリだよ」。彼女はAILEY。ジャパニーズ・ナンバーワン・シンガーだよ」

「君が褒めるなんて珍しいね？ 八神です。よろしく」そう言って愛莉に笑いかけた。

「AILEYです。よろしくお願いします」

この夜は八神も同席し3時間程打ち上げが続き、愛莉が自宅に戻ったのは10時近くに

なっていた。帰りにスティーブがお土産ですと言って、慎二にエフエクターをプレゼント

してくれた。香港でそんな話をしていたのだろうか？

小さな箱にはSee you next time at USA
！と書かれていた。

「アメリカかー。行ってみたいなあ……」

窓から夜景を見ながら、愛莉は独り言を呟いた。

第26話 ロンド

2月24日11時を過ぎた辺りから愛莉はソワソワし出していた。今日がオンエアの日である。いや、正確には後1時間53分後だから25日なのだが

テレビの前のソファで待ち構えていた。それは慎二も同じ気持ちであった。勿論、録画はしてあるから見逃す事は無いのだが、やはり初めてのテレビ出演であるから、愛莉がどんな風に映っているのか気になっていた。

「なんか喉が渴いちゃったよ。ビール？ワイン？どっちがいい？」

慎二が愛莉に話しかけたが緊張のためか聞こえないようである。

慎二はソファの後ろから愛莉を軽く抱きしめ耳元で囁いた。

「後2時間もあるんだよ？座ってないで何か他の事しようよ・・・」
そう言つて耳たぶを

軽く囁んだ。

「あつ・・・ばかつ。震えを止めてくれるの？」

二人がシャワーを浴び再びソファに座ったのは放送時間10分前であった。

番組タイトルは「ミュージックアップローダー」である。

「愛莉が激しすぎるから遅刻するとこだったよ」

「だって・・・慎二だって直ぐに大きくなるんだもん・・・エッチ。あつ、始まるわよ」

ディープパープルのバーンがテーマ曲のようである。ティムと愛莉が冒頭の挨拶をし番組が始まった。

「愛莉、めっちゃ可愛い・・・それに衣装もカッコイイ！さらに別人に見えるね」

「ありがとう。ほらステイプの演奏が始まったわ・・・」

画面ではGATのHard-Edgeが演奏されていた。まさに神

業的なテクニクで音を重ねて

ゆく。これがワンテイクとは信じられないほどであった。

そしてトークタイムになり愛莉のアップが何度も映されていた。

「愛莉は肌がきれいだからハイビジョンにも負けないね。でも、よくあれだけ英語を

話せるようになったね？」

「慎二のお陰よ。歌が始まるわ・・・もうダメ・・・緊張して死にそう」そう言っ

て慎二にしがみついた。

画面には愛莉とGATのシルエットだけが映されている。そして照明が入った。

慎二は圧倒されていた。スティープのギターもだが愛莉はそれ以上だった。

高音域の伸びやグルーブ感、それにダンスがカッコイイ。日本でこれほどの歌手は

観た事がない。そう思った。以前DVDで観たティナ・ターナーのよう

だ。ダンスがセクシーな動きになり、スローテンポなソロが始まると過激なほど妖艶な感じすら

していた。

「愛莉・・・凄いね。あんな踊り何処で覚えたの？」

「わからない。勝手に身体が動いちゃうんだもん。変かなあ？」

「そんなことないよ・・・これは視聴率取れるんじゃない？」慎

二は素人考えでも

そんな風に思えた。

翌日テレビ局には電話が殺到していた。

あの女の子は誰？日本人なのか？さまざまな質問だったそう

だ。その後の発表で、視聴率もローカルで4%を超えていたそうで、深夜帯としては

上出来である。しかも、最近は数字が取れない音楽番組だから尚更

である。

プロデューサーも上機嫌だそう。スポンサーが2社程名乗りを上げているという。

しかもこの番組の効果でGATのCDもオリコンチャートに顔を覗かせるなど、スティーブの所属するプロダクションも大満足であったそう。

「今回のゲストは吉田滋直なんだって？日本の大御所じゃないか？」
慎二が驚きながら
愛莉に言った。

「もう50歳を過ぎてるのに凄くパワフルな人ね。テレビでしか観た事ないけど結構
楽しめそう。期待しててね」テレビ局に送ってきた慎二にウィンクしながら、愛莉は車を降りた。

局に入る後姿にはもうオドオドした所は微塵もない。愛莉は更に美しくなっていた。

第27話 死の島

その日もEXTVでミュージックアップローダーの収録があった。すでに5回目という事もあり愛莉も結構慣れてきて、トークもそこそこ出来るようになっていた。

番組の視聴率は初回の4%台から回を重ねることにアップし、深夜帯にもかかわらず7%とかなりの数字を出すようになっていた。大手音楽会社もスポンサーに付くことになった。

その頃、この会社からCDデビューの話を持ちかけられていたが、その話は保留にしていた。それは、ノリさんからのアドバイスで一度契約してしまうと移籍や解除に結構手間がかかるなど色々問題があるようなので、ゆっくり考える事にしたかったからだ。

それに初回のゲストで出演したスティーブとはその後も連絡があり、是非アメリカと一緒に仕事をしたいという話もあったのだ。愛莉も音楽的なフィーリングが一番合っていたので、もう一度やりたいた思っていたし、慎二も賛成してくれていた。

何度かテレビ出演をしたが、以前の愛莉の悪い噂はまったく聞く事はなかった。

そもそも慎二が出会った頃の愛莉は髪はボサボサだったし、化粧もまったくせずファッションに至ってはまるで労働者風であったのだ。それがモデル張りのドレスを着て、メイクに仕上げてもらった顔はまったくの別人になっていると言っても過言ではなかった。

「お疲れさま。愛莉ちゃん今日も慎二さんがお迎え？」メイクの松井涼子が声をかけた。

「うっん。残念だけど今日はタクシーなんだ。彼、シンガポールなの」

「そうかあ、じゃあ一緒にご飯行かない？」

「ホント?!うれしい、涼ちゃん。今夜はコンビニで弁当買って帰

る予定だったの」

「ちよつと待つて。すぐ用意するわ」同世代と言うこともあり愛莉と松井涼子は

最近かなり親しく話しをしていた。社員食堂で一緒にランチをした
り、先日も慎二の

出張中に飲みに行った事があつた。

二人はEXTVのすぐ側にあるドルチェという店に入った。涼子のお
気に入りのお店である。

「涼ちゃん、いらっしやい。あれ？・・・お連れさん・・・AILEYさ
んじゃない？今人気の」

「そうよ。いいでしょ？ 今日も美味しいの作つてよ、マスター」
テーブルが4つとカウンターの小さな店だが、アップライトピアノ
やギターアンプなどが

置いてあり、時々ジャズライブをやるそうである。

「ここのマスターも演奏するのよね。ジャズギターだけど・・・結
構シブイのよ」

涼子の話では、マスターは以前東京でジャズミュージシャンとして
生活していたそうだが

父親が亡くなり遺産が入ったので、名古屋で店を持ったそうである。

「このタンシチューが美味しいのよ。マスター、ビールおかわり！」

結構な量の料理を食べ盛り上がった二人は、もう1軒行こうと栄の
街に繰り出した。

プリンス通りを歩いていると、二人の前に急に男が立ちはだかつ
た。

「よう、愛莉久しぶりじゃねーか。この前はよくもやってくれたよ
な」

「何よアンタ！AILEYに気安く触らないでよ」涼子が男の腕を掴
んだ。

「何のマネだ？ねーちゃん。痛い思いがしたいのか？」そう言つて
涼子を睨みつけた。

「直人やめてよ。もうアナタとは関係ないのよ！」

「おいおい、俺はまだ何もしちゃいないぜ？また連絡するわ。ちょっと買つて欲しい

ものがあるんだ」そう言つてポケットから封筒を出した。

「これはサンプルだ。色んなのがあるから言つてくれ。それじゃあな」

そう言つと錦の方に向かつて歩き出した。

「なによ？あの男。失礼なヤツね」涼子は愛莉の腕を引っ張り歩き出した。

愛莉はいやな予感がしていた。封筒の厚みからして多分写真か何かだろう。

直人は同棲していた時、セックスしているところをビデオや写真に撮っていた。

中には直人の仲間に撮らせていたものもある。勿論その連中ともセックスをしていた。

涼子と別れ自宅に戻つて封筒を開けると、やはりそういった類の写真だった。

それは直人の仲間が2人来たとき物で、嫌がる愛莉の性器と肛門を同時に犯しながら

一人がずっとビデオを回していた。いやな記憶が蘇ってきた。その頃はそうしなければ

住むところが無かったので諦めていた。見知らぬ中年に抱かれるよりはマシだとさえ

思っていた。それにそういった行為の後の直人は、とても優しくかったのだ。

愛莉は写真をくちやくちやにしてゴミ箱に捨てた。

次の日、慎二が帰ってきてても直人の事は話さなかった。いや、話せなかった。

慎二がシンガポールで買ってきた愛莉へのプレゼントの袋を、楽しそうに開けているのを

見ては
・
・
・
・
・

第28話 ノアの洪水

ミュージックアップローダー7回目の収録日、EXTVに愛莉宛の電話が入った。

直人からである。

「もしもし、写真見てくれたかな？いくらでもコピーは出来るし、ネット配信も考えてるんだぜ。良かったら値段の相談をしたいんだけどね」

「わたし大金なんか持ってないわ。出演料なんか大した事ないし・・・」

「そんな事はわかってるよ。少しお小遣いが欲しいだけだから」

「どうすればいいの？いくら欲しいの？」

「慌てるなよ。それを決めようと言ってるんだ・・・5時に中村のアルファに来てくれ」

そう言つて直人は電話を切ってしまった。愛莉の予定をを既に知っているのであらう。

愛莉は慎二に話すべきか考えたが、その答えが見つからないまま収録が終わった。

そして慎二に打ち合わせで遅くなるから迎えに来なくてよい、と電話を入れてしまった。

「よう。時間ピッタリだな。ここじゃ話もなんだから・・・」喫茶店では話しくいから

直人の会社へ行くという事だった。車で連れてこられた場所は、中村区内の雑居ビルだ。

「社長。連れて来ました」直人がペコペコと頭を下げているその相手は、以前直人のアパートで見た暴力団員風の中に居た男だ。

愛莉はそこが暴力団の事務所であることをその時初めて知ったのだ。「わざわざ来て貰って悪かったね。こいつには大分貸しがありましたね」ドスの効いた声には聞き覚えがあった。愛莉は知らなかった

が男の名前は石田洋平といい、広域暴力団に所属

する石田組の組長だった。昔からの組の多いこの地域においては比較的新しく、主に

風俗店などを稼ぎの基にしていた。構成員の大半がホストのような出で立ちで、パツと見

彼らがヤクザだとは誰も思わなかった。

「直人が少しずつ返済したいと言ってるんだけど、信じれなくてね。そうしたら貴女が

立て替えてくれるって言ってますよ。まあ、月々5万円なんてはした金なんですけどね」

「なあ、愛莉。その位だったら何とかなるんだろ？俺を助けると思っ
て・・・頼むよ」

直人が懇願するように愛莉に話しかけた。

「わかりました・・・直人、それ以外には要求しないのね？」愛莉は睨み付けるように

直人に言った。

「もちろんだよ！助かった、持つべきものは友だな。社長そう
いうことで何とかお願い

します」愛想笑いを浮かべながら直人が言った。

「それじゃあお嬢さん、ここにサインだけお願いできますか？」そ
う言っ
て書類のような

物を愛莉の前に置いた。愛莉がサインをすると大事そうに折りたた
み、石田は金庫にしまい

ながら愛莉に話しかけた。

「最近、随分ご活躍だそうですね。実は先日貴女の番組を観させて
もらいましたよ。

いや、素晴らしい！きっと今後も大活躍されると思いましたよ。今
日はご苦労様でした」

愛莉は以外に簡単に済んだことを内心ホッとしていた。当然恐喝め
いた話が待っている

ものと思っていたからである。5万円位なら何とかできると思った。EXTVのギャラは1回6万円になっていた。それが月に4回振り込まれるのだから、慎二のお金を使わなくても大丈夫だ。

「愛莉、写真のフィルムを渡すよ。今日はアリガトな・・・」意外にも簡単な展開に愛莉は戸惑っていたが、直人もよほど困ったの事だったのだろう。愛莉を脅す気など無かったの

かも知れない。自分が悪者と決め付けていた事が、少し悪かったよ。うな気がしていた。

直人は元々は優しい人間である。それがギャンブルで借金が出来てから変わってしまった

のかもしれない。直人は以前のアパートからマンションに引っ越しているようだった。

一緒に中に入るのは躊躇われたが、直人も変な事はしないだろうと思った。

そんな事をすれば、毎月の返済を肩代わりするのを止めると言えばいい事なのだから・・・

4階建ての古そうなマンションの1階が直人の部屋だった。

「散らかってるけど・・・まあ、入ってよ。インスタントコーヒーでも入れるから」

リビングに通された愛莉は身体が凍りついた。見知らぬ男たちが撮影現場のような

機材の中で待っていたからである・・・

第29話 テンペスト

「……何これ？ 騙したの?!」愛莉は震えながら直人に言った。

「久しぶりに記念撮影がしなくなつてよ。今日はプロの方々に集まつてもらつたんだ」

さつきまでの弱々しさなど欠片もない、威圧的な態度で直人が言った。

「あなたそんな事したら……あのお金は払わないわよ!」愛莉は精一杯強い態度で

直人を睨み付けながら言った。

「それは無理だね。お前は限度額無制限の連帯保証書にサインしてるんだ!何なら裁判所で

取り立ててもらつてもいいんだぜ」愛莉は法律の事は何も分からなかったが、連帯保証人という言葉は聞いたことがあった。

「じゃあ、始めましょうかアニキ」ガツチリした体つきの男が直人に言うと、愛莉の身体を

羽交い絞めにした。愛莉は危険を感じ必死で抵抗したが、それを見て数人が愛莉を押さえにかかった……

数分後、愛莉は口にテープを貼られ、全裸でベッドの四隅に手足を縛られた状態で直人の

愛撫を受けていた。勿論カメラが回っている。

「直人さん、俺たちにもご褒美頂けるんでしょうね？ こんないい女、ちよつと居ませんよ」

「わかつてるよ、順番だぞ。それにコイツは中に出しても妊娠しないしな。もつとも

コッチの穴は、はなっからそんな心配は無いけどな」

愛莉が解放されたのは深夜3時を廻ってからだった。ふらふらと1号線沿いを歩きながら

慎二の待つ自宅に向かって歩いていった。太ももを伝って血の混じった男たちの体液が

ブーツの隙間に流れ込んでいる。涙は枯れ果てていた。

自分が僅かでも直人を信じた悔しさと、慎二に相談しなかった事への後悔から

泣き叫びたい気持ちだった。

その日愛莉は家に戻らなかった。自分でもどうしてよいかわからずにずっと公園のベンチで

水鳥の姿を見ていた。

夕方、携帯電話が鳴った。慎二からだ。

「もしもし、愛莉？昨日はどうしちゃったんだい？ははー、さては飲みすぎたな？」

「・・・うん、ゴメンね・・・ホント・・・ゴメンネ」

「いいよ、僕の方こそ今朝ちょっと早く出たからお帰りのキスできなかったんで

愛莉が拗ねてるんじゃないかと思ってさ。明日の夜戻るから、それまで我慢してね」

「慎二・・・わたし・・・何でも無い。愛してるわ」

「わかってるよ。じゃあね愛莉、愛してるよ」

愛莉はそのまま携帯電話を川の中に投げ捨てた・・・

その翌日、金城ふ頭はパトカー、救急車が停まり騒然としていた。

「何があっただんです？こっちは急いでるのに・・・この荷物を9時まで以降ろさなきゃ

いけないんですよ」

「すいませんね この先で水難事故がありまして・・・もうちょっとで終わりますから」

警察官がトレーラーの運転手に説明をしていた。

「こんな所で水難事故ですか？何かあったんですか？」

「いや、まだよくわからないのですが・・・自殺でしような。さっき人が浮いてるという

連絡が入りまして・・・今引き揚げている最中なんですよ」

「こんな寒い日に水に入っちゃ死ぬわな。そうでしたか、ご苦労さんです！」

「いやどうも。何でも若い女の子らしいんですが・・・可愛いそうに・
・何も死ななくても」

「あつ、終わったみたいですよ」運転手が高い席から先を見ながら言った。

「はい、今こっちにも連絡が入りました。ご協力ありがとうございます
ました。どうぞ・・・」

あつ、雪が降ってきましたね。お気をつけて！」

大型トレーラーは軽くクラクションを鳴らし静かに発進した。
4月にしては珍しい雪が海の中に静かに吸い込まれている。

愛莉が慎二と出会ってちょうど4ヶ月目の木曜日の朝だった。

第30話 空

慎二に港警察署から連絡が入ったのはその日の夜だった。

「すいません。吉川さんでいらっしゃいますか？私、愛知県警港警察署の谷崎と申します。」

今朝、金城ふ頭で女性の水難事故がございまして、その件で少しお尋ねしたいのですが」

「はい、どんなご用件でしょうか？水難事故っていったい・・・」

「実は金城ふ頭で水難事故があったのですが、その女性が貴方のクレジットカードを所持しておったんですよ。年齢は10代後半から20代半ばでしょうか・・・白い毛皮のコートに

黒のワンピース、それに黒のブーツを履いておられました。お心当たりは無いでしょうか？」

慎二は目の前が真つ暗になるのを感じ、両足に力を入れ踏ん張った。一昨日愛莉が着ていた服装だった。なぜ？何故、愛莉がそんな事故に。直ぐに慎二は港署に向かった。

「すいませんね。ご足労いただきました。何せ所持品がこれしか無かったものですから・・・」

「間違いありません。愛莉のものです・・・愛莉は？愛莉は何処にいるんですか！？」

「まあまあ・・・落ち着いて下さい。それで貴方との関係は？」

「婚約者です。愛莉に何があつたんですか？」

「自殺をはかられまして・・・」

「なんですって！そんな馬鹿なことあるわけがない！」

「申し上げにくいんですが・・・彼女どうも複数の者に暴行されていたようで・・・」

体内から大量の体液が確認されたようです。それを苦に・・・ひよつとすると」

「まさか・・・そんな事・・・一昨日自分から遅くなると電話をかけてきた・・・愛莉は

愛莉は何処なんですか！」

「今、市大病院に居られます。ご案内しましょう」警察官は慎二の肩を抱くように

パトカーに案内した。

名古屋市立大学病院の集中治療室に愛莉は居た。本来は面会謝絶であるが本人確認のため

特別に許可を得られた。

それは間違いないく愛莉だった。顔は青白くまるで死人のようであったが生命維持装置を

付け何とか呼吸をしているようである。

「愛莉・・・何でこんな事を・・・」

「先生、こちらが婚約者の吉川さんです。ご様態はどうなんでしょうか？」付き添っていた

港署の谷崎がドクターに尋ねた。

「不幸中の幸いと申しますか・・・川に飛び込まれて直ぐに心臓が停止したようです。

そのお陰で水を飲まずに済んだうえ、何せ水温が低かったので脳死にも至らなかった。

早い発見と救急隊の処置で何とか蘇生はしました」

「助かるんですね？」慎二は縋る様にドクターに聞いた。

「命の心配は無いと思います。ただ脳に少し障害が残る可能性があります・・・それは

彼女が目を覚ましてからでないといけないのですが・・・」

慎二は愛莉が生きているだけで嬉しかった。

その日慎二は病院に泊まった。愛莉の様態が安定し、生命維持装置が外され一般病棟に

移ったので、そのベッドの横で愛莉が目を覚ますのを待っていた。明け方、窓の外が白む頃、愛莉は静かに目を覚ました。

「愛莉！ 愛莉、わかるか？ 慎二だ。・・・看護婦さん！ 愛莉が目
を覚めました！」

慌ただしく看護婦が集まってくると同時に当直の医師も部屋に入っ
てきた。

脈や瞳孔などの検査を済ませ、なにやら質問しているようである。

「先生、愛莉の様態はどうなんでしょうか？」

「少し反応は遅いようですが、身体のほうは大丈夫です」

「愛莉！ 慎二だ、わかんないのか？ おい、愛莉！」 慎二はそう言
って愛莉の身体を
ゆすった。

「無茶はいけません。酸欠が続いたので記憶に障害が出ているのか
も知れません。」

もう暫らく様子を見ましょう。大丈夫。きっと快復しますよ」 医師
はそう言って

慎二のほうを見た。それからまた愛莉は静かに眠りについた。

夕方4時過ぎにまた目を覚ましたが、その時も慎二のほうは見たが
何も言わずに

また眠ってしまった。その翌日も愛莉は無言だった。食事やトイレ
には看護婦に付き添われ

普通に出来ているようである。しかし慎二の存在には気がついてい
ないような反応を

していた。慎二は会社に暫らく休む事を伝えずと病院に付き添っ
ていた。

4日目になって愛莉が言葉を発した。

「きれいなお花・・・」 慎二が飾った花だった。

「愛莉。ボクの事分かるかい？ 慎二だよ。 愛莉・・・」

「シンジさん？・・・ここにちは、わたしは・・・」

そう言っただけ

何かを考え込んでいるようなそぶりを見せていた。直ぐに担当のド
クターが現れ

いくつかの質問をしていた。その診断では一時的な記憶障害を起しているらしかった。

数ヶ月前までの記憶はあるようである。ただ自分の名前と慎二と一緒に暮らしたてからの

記憶だけが飛んでいるという事だった。これには心理的な影響があるとの事で担当医が

もう一人付くことになった。心療内科からである。

その医師の話では、今回の暴行事件によって精神的に相当のストレスを感じ、自分の記憶の

中からそれらすべてを消してしまいたいと、脳が指示を出したのではないかという事だった。

そうする事によって自分を守ろうとしているのだという。

今、その記憶が蘇るとまた自分を傷つける可能性があるかもしれないのだ。

慎二は静かに待つ事にした。

第31話 未完成交響曲

「愛莉、見てごらん。この写真、キレイに撮れてるだろ？」

「ホントだ。慎二さん写真撮るの上手だね」愛莉は笑ながら自分の写真を見ていた。

4月の中旬に退院した愛莉は、慎二のマンションで療養していた。やはり慎二と出会ってからの記憶は無かったが、それでも慎二は満足していた。

「記憶なんて、これからいくらでも作っていけばいいんだから・・・」

医者の話では慎二との出会い以降の出来事の記憶が無いと言っていたが、実際には、愛莉の記憶は小学生の4～5年までであった。多分、父親に性的虐待を受けていた辺りからの嫌な出来事は、すべて消去してしまっているかのように思えた。それでいて通学していた高校や中学の話は憶えているのである。慎二は思った。それならばそれで良いのではないか？

愛莉にとってあれらの忌まわしい記憶は、無い方が幸せなのではないだろうか？

以前観た映画「エターナル・サンシャイン」では人工的にそういう事が出来る近未来を

描いていたが、まさに愛莉はそんな状態になっているのである。ただ、幸せだったはずの

慎二との生活まで消去されたのは、しかたのない事なのかもしれない。

「愛莉、あしたは海を見に行こうよ。少し寒いかもしれないけど、スゴクきれいだと思うよ」

「うれしい。海なんて小学生の時以来見たことないもの。お魚見れるかな？」

「砂浜では見れないと思うけど、美味しいお魚なら食べられるよ」

愛莉はキャハハと笑ながら明日着る服を選びに行った。

慎二はあの日以来会社を休んでいた。それに愛莉のことを考えると、この名古屋に住んで

いてはいけないような気がしてた。今回の暴行事件も、愛莉からの電話や彼女が打ち明けてくれた過去の話などから考えれば、知った人間の仕業に違いなかった。

今回は奇跡的に命をとりとめたが、次は無いだろう。愛莉の記憶が蘇り同じ行動をとらない

保障は何処にもないのだ。それならば、いつそ誰も知る人の居ない海外で生活するのも

悪くないと思っていた。幸いにも商社の仲間や得意先の知り合いに、海外移住者が多数居た

ので、その気になればその人たちのアドバイスを受ける事もできたのである。

その時自宅の電話が鳴った。

「もしもし、EXTVの澤田ですが・・・その後愛莉さんのご容態の方はいかがで

しょうか？もう2週彼女が出演していないということで、毎日問い合わせが多いものですから・・・」

「申し訳ありませんが・・・まだとてもそんな状態では無くて・・・

」
「そうですか・・・お元気になりましたなら何卒よろしく・・・

」
そう言って澤田は電話を切った。今回の事件をEXTVは知らなかった。

慎二のほうから愛莉が急病のため、暫らく番組に出演できない旨を連絡しておいたのだが

高視聴番組でもあったため、局側も大変な事態になっているようである。

愛莉はあれ以来一度も歌っていない。自分にそんな才能があることすら忘れていようである。

「愛莉、今度一緒にアメリカに行ってみようか？知り合いが小さなホテルを経営している

んだ。暫らくそこに滞在して、色んな所を見て廻ろうよ」

「ホント？行ってみたいなあ。映画で観た街とかこの目で見てみたい。いつ？いつ連れて行ってくれるの？」

「そうだな、じゃあ来月行こう。愛莉に英語を教えてあげなくちゃね。ハンバーガーくらいは頼めるようにしておかないと、迷子になったら大変だモン」

「わたしそれ位なら話せるわよ。Can I get a Whopper and Middle size of Diet Coke」

慎二はそれを聞いてビックリしていた。なぜならワッパーはバーガーキングのハンバーガーの事で、名古屋には店舗が無かった。香港に一緒に行った時、帰りに空港内に在る店舗で

愛莉に教えた言葉だったのだ。

記憶が蘇ってきてるのだろうか？

慎二は少し不安を覚えた。

第32話 渦巻く海で

翌朝、慎二と愛莉は内海に向かって車を走らせていた。知多半島の海水浴場で、夏は結構

人が出る場所だが、さすがにこのシーズンは高速を利用する人も少ないようである。

中部国際空港セントレアはこの高速から直ぐの場所にあり、慎二は愛莉との香港旅行を

懐かしむように思い出していた。

「わあー。キレイ！ 慎二さん晴れててよかったね。見て大きな船が見えるわ」

砂浜を走りながら愛莉ははしゃぎまわっていた。

まだ少し肌寒いが、愛莉と一緒に走っていると汗ばむほど身体は暖かかった。

こんな純真な少女が何故あれほどの過酷な人生を歩まねばならなかったのか？

慎二はあらためて愛莉の運命を呪った。

数日が過ぎ、慎二が買い物に出かけようと駐車場に入ると見知らぬ男に声をかけられた。

「吉川さんでいらっしゃいますか？ 倉田愛莉さんをご存知ですよね？」 そのチンピラ風の

男は愛莉の本名を知っていた。慎二はこの時とつさにこの男が今回の事件に関係しているのではないかと思った。

「私は吉川ですが・・・倉田さんですか？ 存じ上げませんが・・・」 愛莉はマンションで

待っている。買い物などはほとんど慎二が行っており、愛莉は家から出ていなかった。

出かけるときは先日のように6時前に出発し、深夜に帰宅するため近所の住人とも

ほとんど顔を合わす事は無い。

「嘘を言ってもらっては困りますよ。実は彼女、借金の連帯保証人になっておられましたね

どうしてもご連絡しなければいけない事があるんですよ。ここに電話するようにお伝え

頂けませんでしょうか？」そう言っ封筒を渡すと、男は黒いベ
ンツに乗り去って
いった。

慎二が封筒を開けるとそこには愛莉をいたぶる男たちの写真と、小さな紙に連絡先が

書いてあった。慎二は怒りで目の前が真っ白になるような感覚を覚えながら呟いた。

「やっぱり脅されていたんだ……」

車に乗ると慎二は直ぐに港署の谷崎に電話をした。谷崎からはその後、何度か愛莉の様態や

不振な人物が現れないか等電話を貰っていたのである。

「分かりました。それじゃあ今からそちらに向かいます」慎二はそう言っ港署に向け

車を走らせた。

「これがその写真です。あまり見ないで欲しいが……」慎二がそう言っ封筒を渡すと

谷崎はチラッと見ただけで鑑識にまわすよう指示した。

「この連絡先は石田組という暴力団の系列の金融会社ですな。やはりそういった組織に

脅されていたでしょう。貴方に迷惑をかけまいとあのような行動をとられたのかも

知れませんが……」

谷崎の言葉を聞き慎二は涙が出てきた。何故自分に相談しなかった

のか？あの時そんな

気持ちで落胆していた自分が恥ずかしかった。愛莉は慎二を思い、自分が命を絶つことに

よって慎二を守ろうとしたのではなかったのか？その思いに気づかなかった自分が情けなかった。

「これは大変な証拠になります、愛莉さんの告発が無ければ罪にはとえません・・・

愛莉さんの容態はいかがですか？」谷崎はもつともなことを言っていた。

犯人が直接手を下した事件ではなく、脅されている証拠が無ければ逮捕する事は出来ない

のである。慎二は、記憶がこのまま戻らない方が愛莉のためだと思っていた。それなのに

この犯人たちを裁くにはその逆の事を望まねばならない・・・その旨を谷崎に伝えると、石田組はなかなか別件でも尻尾を見せない組織でカモフラージュ

のバイトや店長クラスを押さえるのがやっとだということであった。「愛莉さんの記憶が戻った段階でヤツラに会わせ、証拠をつかむやり方法が無いんです・・・」

そう言って谷崎は残念そうに慎二の顔を見た。

慎二はそれなら方法はある。と、心の中で呟いていた。

第33話 ラインの歌

その翌日から慎二の行動は始まった。

愛莉は直接石田組に脅されているわけではないだろう。

そんな簡単な脅し方は谷崎の話から考えてもありえない。ならば愛莉が過去に知っている

人物、その中でも暴力団と繋がりのある、直人という人物を探すことから始める事にした。愛莉の話で大体の住所は分かっている。今もそこに居るかは行ってみなければわからない。

インターホンを押してみた。表札には村上と書いてある。中から出てきたのは40代の

女性だった。何でも1年前にここに引っ越してきたそうである。前の住人の事を尋ねると

暫らく変な郵便が入って困っていた事を話してくれた。

「なんだろう？金融会社からかな？督促みたいな手紙や葉書がい

っぱいきてたわ……」

ちよつと待つて、まだあつたかも？」

そういつて部屋から数枚の葉書を持ってきた。

「蜷川直人……これが本名か」そう言つて葉書をダッシュボードの上に置いた。

区役所で現住所を調べ行つてみると、古い4階建てマンションの1階である事がわかった。

慎二は車を近くに停め暫らく様子を伺っていた。すると中から見覚えのある顔の男が出て

きたではないか。先日慎二のマンションに居た男だ。

「あいつが直人なのか……」慎二はこれからどうすべきかを考えていた。

愛莉の証言が得られない今、物的証拠をいくら集めたとしても逮捕

する事はできない。

それなら何か手段は無いか？愛莉にした仕打ちを考えれば、直接自分で殺してやりたい

ほどの怒りがこみ上げてくる。しかし、そんな事をしたなら愛莉と一緒に住むことも

これから愛莉を護ってやる事も出来なくなるのは自明の事である。

「何か方法は無いか・・・」慎二はその時あることを思いついた。そしてニヤリと薄笑いを浮かべたのだった。

数日後、慎二は愛莉を連れて京都に来ていた。以前愛莉に話したところのある落柿舎や

嵐山の風情を二人で楽しんでいた。宿泊先は慎二とは大学時代一緒にバンドを組んでいた

吉田の旅館である。

吉田もギターをやっており当時はツインギターで結構名前を売っていた。

その後女性ボーカルを入れたが、吉田はその女性と結婚している。

「玲子、吉川が到着したで。ほんま、久しぶりだなあ。3年ぶりか？まあゆっくりして

いってや」物腰の柔らかい京都弁で二人を迎えてくれた。

吉田とは学生時代からよく遊んでいる。ヨシヨシコンビなどと名前をつけられるほど

よく一緒に居た。下宿で酒を飲んだり、スタジオに10時間以上こもってセッションした

事も数え切れない。お互い一目置いていたし、音楽センスも認め合っていた。

慎二は吉田にすべてを打ち明けた。そして暫らく愛莉を預かって欲しいと頼んだ。

「1週間で戻ってくる。それまでの間愛莉を護ってやって欲しい」

「おまえ・・・なんか危ない事考えてるんとちゃうか？」

「大丈夫だ。計画通りいけば必ず上手くいく」そう言って慎二は吉田の顔を見た。

その夜は吉田夫妻と一緒に、遅くまで当時の話をしていた。愛莉も楽しそうに話を

聞いていた。吉田がギターを持ってきて妻の玲子が歌を歌ったりした。

All of me を歌い始めた時、愛莉が突然歌いだした。

その歌に吉田は圧倒されていた。

「メチャメチャ凄いな・・・そこらの歌手と次元が違うんとちゃう？」慎二は内心

ドキドキしていた。愛莉の記憶が蘇ってきたのではないかと。しかしそれは取り越し苦労

であった。愛莉は歌った事など無いとでもいう風に「なんで知っているんだろう？」と

笑っていた。

翌日慎二は名古屋屋に向かい車を走らせていた。

第34話 金の紡ぎ車

マンションに戻り、慎二は連絡してくれと渡された番号に電話をした。

「愛莉はここ暫らく帰ってきてないんですが・・・借金があるなら私が立て替えても

良いかと思ひまして・・・一度相談したいんですが・・・」そう話すと翌日マンションに

担当のものを廻すと言ってきた。すべて作戦通りである。多分明日ここに蜷川直人が現れる

だろう。その時に愛莉の保証の額やいろんな事が分かるはずである。そしてその後の作戦を

ノリさんとも相談してあった。ノリさんの耳には今回の事件の事は入れている。

そつち系の知り合いも居るからそいつらに頼んでみると言ってくれたが、それは断った。

後々の事を考えてである。しかし今回は協力を仰いだ。綿密な計画書を見せた。

「慎さん・・・あんた怖い事考えてるね・・・完璧だけど。わかったよ。人は手配する」

「ありがとうございます。お礼はいづれますんで・・・」

「水臭い事言わないの！仲間だろ？何でも言ってくれよ。それに俺だって愛莉ちゃんを

あんな目に合わせたやつが許せないんだ」そう言ってもう一度計画書を見直した。

翌日、やはり蜷川直人がマンションにやってきた。

「いやあ、すいませんね貴方が立て替えてくれると聞きました・・・」

「それで、愛莉はいつたい幾らの連帯保証を書いてるんですか？ま

さか無制限なんて事は

無いんでしょうね？法律違反ですからね……」

「勿論ですよ！ 愛莉さんは3000万円の保証人になっておられます。……それで

いつ頃ご用意いただけますでしょうか？」

「彼女の債務はそれだけですか？後で出て来たって払いませんよ。その旨一筆書いて

もらえるんでしょうね？」

「分かりました。それも会社のほうでご用意いたします。……で、いつ頃……」

「明日、全額お支払いしましょう。こちらに来てください」

それを聞いて蜷川直人はペコペコと頭を下げ帰って行った。

「あんなヤツのために愛莉は死に掛けたのか……思い知らせてやる」

その日、慎二はなかなか眠れなかった。連帯保証に関しては今回の計画で上手く処理できる

だろう。しかし、愛莉を撮影したビデオや写真の類は、何処にどれくらい在るのかも

分かっていない。それらをこの世から消してしまわない限り、愛莉の未来は無かった。

隠しているとすればあのマンションだろう。直人を監禁し自白させるしかないのか？

いや、愛莉の記憶が戻れば警察が動いてくれるではないか？しかしそれにはリスクがある。

八方塞だった。

翌日午後3時、指定時間を少し過ぎた頃蜷川直人がチャイムを鳴らした。

「それじゃあこれが連帯保証の原本と、これ以外に債務は無い事を書いた念書です。」

お金は確かに頂きました。いや、吉川さん貴方はいい人だ。益々のご出世をお祈り

してますよ。それではこれで・・・」そう言つて直人は出て行つた。

「ノリさん、慎二だ。今出て行つた。後は頼んだ！」

受話器を置くと、慎二は直ぐに家を出た。

第35話 トピアの帰還

> i 3 6 7 4 — 5 3 3 <

:

ベンツ後を追うように2台の車が出て行った。1台はノリさん。もう一台にはノリさんの

知り合いの武田という男が乗っている。今回の話を聞いて快く引き受けてくれたらしい。

元々演劇志望の青年で、ノリさんとは照明の関係で繋がりがあつた。彼が一番の実行役である。

ノリさんの車はゆっくりと直人のベンツの前を走っている。これは交差点でベンツを先頭に

するためである。そしてベンツの後ろを武田の乗ったカローラがピツタリとついていた。

この車は慎二が知り合いのスクラップ屋から用意したものだ。その後ろを慎二のバイクが

走っていた。ベンツが万場大橋にさしかかった頃ノリさんは車の速度を落とし赤信号で

停まった。その後ろの直人のベンツがゆっくりと停まりかけた、その時だった。

ガシャンという音と共にベンツが大きく揺れた。武田のカローラが追突したのである。

「いてっ！この野郎どこ見て運転してるんだ！降りて来いコラ！」
そう言つて直人が車の

外に出た。武田も車を降りペコペコ頭を下げていた。その横に後ろから来たバイクが

停まった。慎二である。黒のフルフェイスのヘルメットをかぶり、革ジャンを着た慎二は

開けっ放しのベンツに乗り込み、フル加速で出て行った。勿論、ノリさんの車は既にそこには居ない。

直人はわめきながらベンツを追いかけて走り出した。武田はその隙に慎二が乗ってきた

バイクに乗りその場を走り去った。道路にはスクラップ寸前のカローラが、煙の中

残されているだけであった。

慎二は堤防の上にベンツを止めると、トランクやダッシュボードなど愛莉のものが無いか

丹念に捜してみた。しかし、何も出てこなかった。

そもそもこの車は石田組の物に違いなかった。多分直人が借りているのだろう。

慎二はエンジンをかけドライブに入れると車から飛び降りた。

ベンツはそのまま堤防を落ちて行き、省内川に突っ込んでいった。

「慎ちゃん、あんたもメチャクチャするねー。スカッとしたけど・

・

その夜G・Bスタジオの近くの居酒屋でノリさんと武田を労っていた。

「ほんとにお二人には世話になった。少ないけど収めて欲しい」そう言って慎二は

封筒を二人に渡した。100万ずつ入っている。

「慎二さん、いけませんこんな大金！これは貰うわけにはいきません！」武田やノリさんが

言うのを慎二は聞かなかった。

「ノリさん。愛莉を連れてアメリカに渡ろうと思うんだ。日本に居ちゃまたあの男に

恐喝されるのは目に見えてる。ノリさんどう思う？」

「オレもその方が良いと思うぜ。名前変えてあっちで活躍すればいいじゃん！愛莉ちゃん

ならきつと大丈夫だよ。なんせスティーブも仕事したいって言うんだろ？」

慎二はその言葉を聞いてアメリカ行きの決心を固めた。

第36話 パピヨン

その頃石田組の事務所では血まみれの直人が床に倒れていた。

「このボケが！車盗まりましただど？それでお金も盗られちゃいました・・・アホか！

お前がちよろまかしたんと違うのか？」

「ちつ、違います！本当なんです。必ず捜しますから！」

「なら、何故逃げようとした？あんまり遅いからまさかと思ってマシヨンへ人をやったら

お前がスーツケース持って出てきたと連絡が入ったんじゃ！お前持ち逃げする気やな？」

「嘘じゃないです！本当なんです。組長！信じて下さい！」

「おい、こいつなかなかホンマの事言いよれへんから、喋りやすいようにしたつてくれるか？」

「直人、組長も怒ってるんだ。悪いけど正直に話してや。おい、ペンチ持ってこいや！」

「ひいい。助けて下さい！」

「おら、口開けんかい！喋りなくなるまで1本ずつ抜いたるからな・・・ハイまず1本」

鈍い音とともに直人の前歯が折れた・・・

京都に戻った慎二は、吉田に今回の出来事を話した。

「その直人つヤツ、今頃酷い目に合わされてるな。慎二、注意したほうが良いぞ。」

そいつは論理的に考えるヤツじゃなさそうだ。カンを働かせ慎二が犯人だと考えるかもしれないぞ」

「それはわかってる。だから愛莉をつれてアメリカに行く事にしたんだ」

「いつから行くんだ？」

「まだ決めていない・・・なるべく早くだ」

「それじゃあ、暫らくここに居ろよ。なに、宿泊費なんか必要ない別館の方が忙しくて

こっちは知り合いしか泊まらせてないから」

「・・・世話かけるな。この恩は一生忘れへん」

「おまえ・・・京都弁うつつとるやないか？」そう言って二人は大笑した。

五月の中旬、慎二はマンションの売却の契約をするため名古屋に戻っていた。

荷物などもすべて処分し、マンションと合わせ2700万程の現金を受け取り銀行に

預けた。名義は愛莉である。元々持っていた預金と合わせ7000万近くが愛莉の口座に

入っている。これだけあればたとえアメリカに渡ったとしても愛莉が不自由する事は

無いだろう。愛莉とは15歳の年齢差であるが、自分の方が先に死ぬかもしれない。

その時の保険のようなものである。

アメリカでは知人のホテルを手伝う事になっていた。慎二の経験や知識などを考慮して

月5000ドル程出してもいいと言ってくれた。今の給料よりはだいぶ下がるが

それでも愛莉と暮らすには充分だろう。

慎二はマンションに戻り、書類を整理してカバンに入れた。二度とここに戻る事は無い。

愛莉と暮らした僅かな時間だったが幸せな空間であった。

キッチンで煙の中作ってくれた朝食を思い出し、顔がほころんだ。

慎二がマンションを出て駐車場に入ろうとした時、背中に激痛が走った。振り返ると

直人が立っていた。その顔は以前見た顔とは別人のように醜かった。
「おい！何をした！痛っ・・・おい待て！」直人は足を引きずりながら逃げていった。

慎二は激痛の中、背中に手をまわしたがその痛みの場所には手が届かない。

「あいつ・・・何をしたんだ・・・クソっ」慎二は自分の足元が真っ赤な血溜まりになっっている事に気がついた。

刺された？？

その時駐車場に入ってきた住人が慎二を見て悲鳴を上げた。

慎二は薄れ行く意識の中で、愛莉と歩いた内海の砂浜を思い出していた。

愛莉の頬をキラキラと波に反射する光が撫でている。その愛らしい唇が慎二の名前を

呼んでいる。

「えっ？ 何？ 聞こえないよ・・・もう一度言ってよ」

「慎二・・・愛してる」

駐車場の床に崩れ落ち、真っ赤な血溜まりの中で慎二は幸せそうな顔をしていた。

：

> i 3 6 7 3 — 5 3 3 <

第37話 アルミータ

京都の吉田の旅館で、愛莉は吉田に借りたCDを聴いていた。初めて聴くはずなのに何か妙に懐かしい、そんな感じのする曲である。

「どつかで聴いたのかな？なんていう題名だろう・・・W i
t h o u t Y o u かあ」

N o I c a n ' t f o r g e t t h i s e v e n i n g
O r y o u r f a c e a s y o u w e r e l e a v i
n g

B u t I g u e s s t h a t ' s j u s t t h e w a y
T h e s t o r y g o e s

忘れることなどできないわ 今宵と

去りゆくあなたの横顔

しかたがないの わかつてる

こうなるしかなかったのよ・・・

愛莉は歌詞を読みながらドキツとした。知ってるのだこの曲を・・・

「どうして涙が出るんだろう・・・悲しい曲だから？」

違うわ・・・慎二さんと一緒に歌った事がある。

そうよ・・・スポットライト

たくさんのお客さん・・・慎二？ ギターを弾いてる。

わたし・・・何でここに居るの？ 慎二は？ 慎二はどこ？」

愛莉は何かに開放されたように外に飛び出した。

「愛莉ちゃんどうしたんだ？」吉田が慌てて愛莉に近寄って言った。

「慎二、慎二はどこ？ 慎二はどこに居るの？」

「愛莉ちゃん・・・記憶が戻ったんだね？」

「慎二は今名古屋に行ってる。今夜帰ってくるよ。大丈夫、心配しなくても」

「だめ．．だめよ名古屋に行っちゃ！ 慎二に電話をして！お願いだから」

愛莉のそのとりつかれた様な様子を見て、吉田もいやな予感がし直ぐに慎二の携帯に

電話をした。何度かけても繋がらない。着信はしているようである。「愛莉ちゃん、兎に角もう少し待ってみよう。8時頃には帰ると言っていた」

愛莉は少しずつ思い出してきていた。そして自分が橋から飛び降りた事も．．．

「わたし．．生きていたんだ．．」

事情を慎二から聞いていた吉田は、何故愛莉が京都にいるかを説明し、愛莉の記憶が蘇り

また自分を傷つけるような事をするのでは無いかと考え、慎二がアメリカ行を決めている

事など、愛莉の記憶喪失の間に起きた事を話した。

夜10時になっても慎二は戻らない。吉田は名古屋の友人に電話をし慎二のマンションを見てきてくれと頼んだ。

12時をまわってその友人から電話があった。

「なんだって！．．．．．そうか、わかった。世話をかけたな．．

ああ、ありがとう」

「何か．．．あつたんですか？」心配そうに愛莉が吉田に聞いた。

「愛莉ちゃん、気を確かに持って．．．．．吉川が刺されたらしい」

「．．．．．うそ．．うそでしょ？ いや．．いやあー！」
取り乱す愛莉を玲子がなだめ、3人は直ぐに名古屋に向け車を飛ばした。

第37話 アルミータ（後書き）

慎二・・・死んだの？

第38話 奇跡の歌

慎二は刺された後、マンションの住人の通報で名古屋掖済会病院に運ばれていた。

直人の刺したナイフは、ほぼ心臓に達しており、後数ミリ深ければ手の施しようが無かった。

4時間に及ぶ手術によって何とか命はとりとめていたが、予断は許さない状態である。

ICUで24時間の看護体制がひかれていた。

「先生、吉川さんの様子はどうなんでしょう？」担当医に詳しく話を聞いているのは

港署の谷崎である。彼はあの後も石田組周辺の動きを監視していた。

今回蜷川直人が

組から相当な暴行を受けていたことも把握していた。しかし、そのことと慎二が刺された

事が繋がっているとは、まだ分かっていないようである。3時を過ぎた頃愛莉たちが病院に

到着した。吉田の友人で、名古屋で飲食店を営んでいる今西が病院を見つけ出していた。

「今西、よく捜してくれた。こんな時間にすまないな。病室は分かるか？」

「よっさん、水臭い事言うなよ。3階だ。多分集中治療室だから面会は出来んと思う・・・」

4人は3階のナースステーションで看護婦に様態を聞いた。

「吉川さんは集中治療室です。生命の危険は脱したと聞いてますよ。ご心配でしょうが

私たちが責任を持って看護いたしますので・・・」そう言って愛莉たちを気遣ってくれた。

「あの、愛莉さんですよ。私、港署の谷崎と申します。今回の件で少しお話したい」

事が」谷崎の名前を慎二から聞いていた吉田が口を開いた。

「谷崎さん、愛莉の事件から担当されてるんですよ？僕は吉川の大学時代からの親友で」

吉田といいます。慎二から色々聞いてますんで……」

吉田は今までの経緯を詳しく説明した。

「そうですか……吉川さん、そんな無茶な事を。今回は命をとりとめましたが、後数ミリ

ナイフが深く刺さってれば、間違いなく死んでたそうですよ。まあ、犯人は絶対逮捕しますからご心配なく。それと愛莉さん、記憶が戻ったんですか？お話しぶりだとそんな感じにお見受けしましたか？」

「はい。今日すべて思い出しました。わたしの事は何でもお話しします。いろいろお世話になったそうで……犯人は直人なんですね？必ず捕まえて下さい！」

「勿論ですよ。それに石田組自体にも捜査の手は回ると思います。兎に角、吉川さんが快復するのを待ちましょう」

翌日、昼を過ぎた頃慎二は目覚めた。呼吸をすると痛みがあるらしく時々顔を引き攣ら

せていた。担当医の特別の許可を貰い愛莉だけ集中治療室に入ることを許可された。

「慎二、愛莉よ……頑張つて。絶対治るから！愛してるわ。慎二」

その言葉に反応するように慎二の手が動いた。愛莉はその手をぐっと握った。

僅かな力で握り返してくるのが分かる。その力は愛莉を勇気付けさせるのに十分なもの

だった。

夕方、吉田たちも面会を許可された。慎二は話すことは出来なかったが、吉田を見て

少し笑い顔を浮かべていた。吉田にはそれが何を言っているのかわかっていて。

「ヘマやつてしもたって言いたいんやろ？わかるぞ。はよ治して名誉挽回せなな」

吉田は涙をぬぐいながら慎二に声をかけていた。

吉田夫妻が帰った後も愛莉は病院で静かに慎二を見守っていた。

3日が過ぎ、傷の治療も順調なため、慎二はICUから個室に移された。

この頃には話すことも出来るようになっており、事情を聞きに来た谷崎に直人が犯人である

事も伝えていた。警察は逃亡した直人の身柄確保のため石田組を強制捜査し、その時に

愛莉への暴行を記録したDVDや写真などを押収した。これは同じものが直人の部屋からも

発見されている。そこには壮絶な愛莉への暴行の一部始終と、犯人の顔がはつきりと映し

出されていた。また、それ以外にも石田組の事務所からは拳銃7丁、覚せい剤2キロ

偽造パスポート等、さまざまな犯罪の証拠品も発見されている。

後は直人を見つければすべての証拠が揃うのである。警察は指名手配と全国に捜査体制を

とっていた。

「お陰さまで石田組長は逮捕する事が出来ました。後は蜷川直人を見つかるだけです」

「すいませんでした。色々ご迷惑をおかけして・・・愛莉の件もずっと捜査していてくれ

たんですね。ありがとうございます」かなり快復した慎二が谷崎に

頭を下げた。

「こちらこそ、手間取って申し訳ない。一日も早く蜷川を逮捕しますからまたご協力をよろしくお願いいたします」そう言って病室を出て行った。直人が刺されてから既に1週間が経っていた。

第38話 奇跡の歌（後書き）

いよいよ次回で完結します！

第39話 完結 白いセントレア

蜷川直人の死体が発見されたのは、慎二が刺されてから1カ月後の事であった。

関ヶ原の山中に捨てられているのを登山者が見つけていた。解剖の結果、激しい暴行を受けたためのショック死である事が判明した。指や歯は、ほとんど残っていなかったうえ、性器も金槌のようなもので潰されていた。

「こんだけの事されたら、死んだほうがええと思うわな普通……」

「谷崎は死体を見て

呟いた。その後、蜷川直人への暴行を一部始終見ていた石田組の組員が恐喝で逮捕された時

直人への暴行の指示を組長がしていた事を仄めかす供述をしたため、石田組長は牢屋内で

殺人教唆の罪で再逮捕された。実行犯も全国指名手配になっている。勿論、愛莉への暴行も、DVDからすべての実行犯が逮捕されていた。

事件のすべてが決着したのは、その年の暮れが近づいた頃である。

「ねえ慎二、憶えてる？ここで待ち合わせしたんだ、私たち……」

「憶えてるよ。ずっと昔の事のようにだ……いろんな事があった1年だったね」

慎二の身体は、以前とまったく変わりのないほど快復しており、愛莉は再びEXTVに出演

するようになっていた。今ではサングラスをかけなければ普通に歩く事も困難なほど、人気が出ている。

しかしそのミュージックアップローダーも、今日の収録を最後に愛莉は辞めることを伝えていた。二人は1週間後の12月24日にア

アメリカに向け出発する事になっていたのだ。

その日のセントレアは、寒波の影響でうっすらと雪が積もっていた。
「慎二、今から私たちの新しい1ページが始まるのね」

「そうだよ・・・まだ何も記されていない、今日の滑走路のような真っ白なページだ」

「私の事ずっと愛してくれる？こんなふうに」

「ああ、ずっとだ。愛莉が嫌だって言うまで」

「じゃあ、絶対に嫌だって言わない！」

ノースウエスト航空　ロサンゼルス行きの搭乗手続きが始まっていた。

「暫らく日本とお別れだね。愛莉寂しくないかい？」

「全然。慎二と一緒になら寂しいなんて思わないわ」

重いエンジン音がし機体は急加速を始めた。

離陸し、旋回する飛行機の窓から雪化粧をしたセントレアが見えている。

「綺麗だな・・・こんなセントレアは初めて見たよ」

慎二は愛莉の横顔の向こうに見える滑走路を見ていた。

「さよなら・・・白いセントレア・・・」

さまざまな思い出と痛みを置いて、二人は新しい世界に旅立っていた。

：

：

白いセントレア

3335 | 086347

第39話 完結 白いセントレア（後書き）

読んでいただいた皆さん、どうもありがとうございました。
次の作品もまた是非読んで下さいね。
それでは暫しのお別れです。

THX CU!

dolce!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8991i/>

白いセントレア

2011年1月24日18時44分発行